

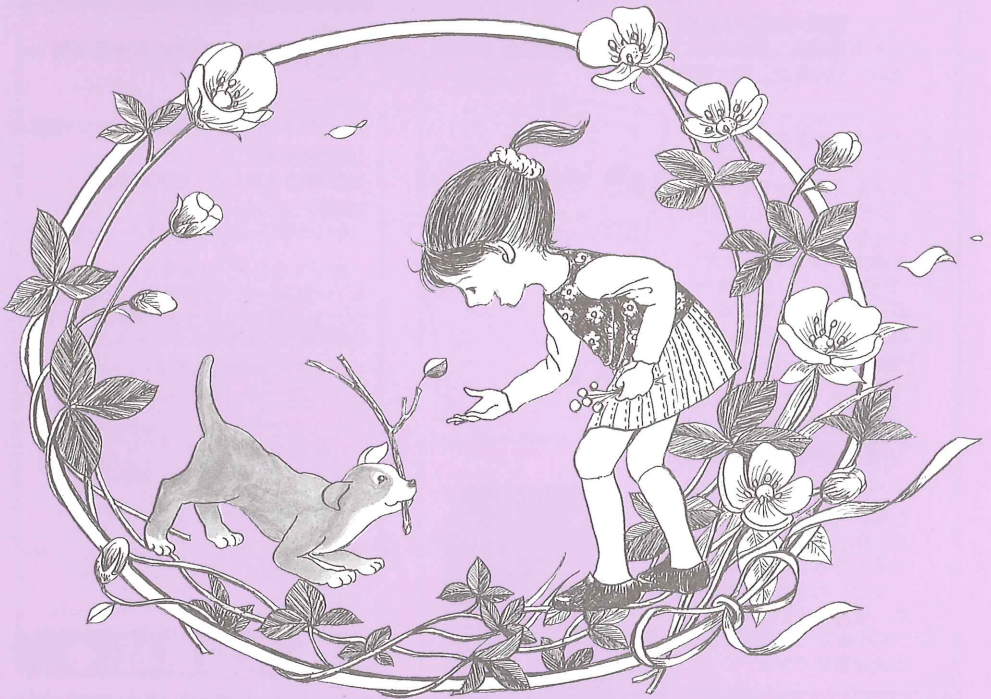
乳幼児期の育ちと保育を考える

# 幼児の教育

特集

いま、倉橋と出会う6  
「何にもしない」

6  
2010



# フレーベル館から新しい月刊保育誌が誕生!

園の未来をデザインする

# 保育ナビ

理事長、園長、副園長、主任など、保育現場をマネジメントするすべての保育者のための月刊保育誌が誕生しました。

文部科学省や厚生労働省の動向など、保育を取りまく政策レベルの話題を含め、これから園の未来を担う保育者にとって必要性の高い情報を、わかりやすく紹介します。

26×19 cm 80 ページ 定価 950 円 (税込)



## ① 他園の様子がよくわかる 「特集 1」500 人アンケート & 座談会 「特集 2」実践報告

4 月号のテーマは「選ばれる園になるために」。少子化の中、今後の園のあり方を考えます。

5 月号／「子育て支援」、6 月号／「感染症」です。その他、「研修のあり方」「評価と公表」「保護者対応」などのテーマを取りあげます。



## ③ グラビアページ 園の旅 ～伝統園をたずねて

全国 60 か所以上の保育風景を撮影してきたカメラマン・渡辺悟が、各地の歴史ある園をたずねます。園舎や子どもたちが生活する姿から、園の歩みが感じ取れます。

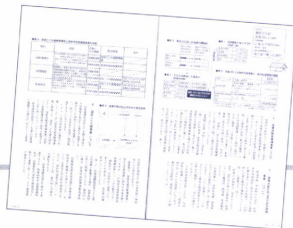
4 月号は、お茶の水女子大学附属幼稚園です。



## ② 園経営に直結する情報満載

《保育コンサル》  
「園経営の扉をひらく! 保育マネジメント講座」  
《保育最前線》  
「国の動きを読む! 研究者の目」  
《保育アラカルト》  
「ソーシャルワーカーの園支援ノートから」など

園のマネジメントを考える上で欠かせない「予算」や「人」の管理、行政の動きなどを、《保育コンサル》《保育最前線》《保育アラカルト》のコーナーに分け、わかりやすくお伝えします。



## 年間購読

「保育ナビ」を 1 年間お買い求めいただく場合は、年間購読をおすすめ致します。詳しくは、下記までお問い合わせください。

# 幼児の教育

第109巻 第6号

## 目次

### ● 巻頭言 ●

築山づくり 造形遊びとの出会い	白井嘉尚	4
-----------------	------	---

### ● 特集 ●

いま、倉橋と出会う 6 「何にもしない」		8
----------------------	--	---

「何にもしない」 — 「廊下で」 より —	江波諄子	9
-----------------------	------	---

人をないがしろにしない、保育という思想	菊地知子	12
---------------------	------	----

追想 倉橋惣三先生と坂元彦太郎先生	林 健造	18
-------------------	------	----

### ● 園のくらしを育む 3 ●

幼児とアート (1) — アート経験を支える居方 —	秋田喜代美	24
----------------------------	-------	----

保育園と児童館の一体運営から見えてきたもの	石井 雅	28
-----------------------	------	----

乳幼児期の育ちと保育を考える

# 幼児の教育

第109巻 第6号

---

---

● 保育の創意工夫 6 ●

雨の日の散歩 前原 寛 ..... 34

● 発達心理学者の子育て奮戦記 (11) ●

それぞれの育ち 長田瑞恵 ..... 38

● 幼稚園の源流を求める旅 森有礼の第二次在米時代 (4) ●

森有礼の第一次在米時代 国吉 栄 ..... 44

● 保育の現場から ●

“友だちをみつけよう” “みんなで大きくなろう” 山田智子 ..... 52

● お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み (42) ●

学内シンポジウム  
「保育現場と協働して学生を育てる」を振り返って(2) 佐治由美子 ..... 58

---

---

# 巻頭言

## 築Eびくり

### 造形遊びとの出合い

白井嘉尚

くしくも二年前、教育学部の附属幼稚園園長を併任することになりました。大学では美術を専攻する学生に、絵の見方や描き方を指導してきたわけですが、その延長上に幼稚園の現場が待ちうけているとは思ってもみないことでした。幼児教育の基本が「遊びを通した教育」であり、また「環境を通した教育」であることすら知らない私でしたが、その意味するところに、美術分野とつながる内容が含まれていると思うようになってきました。そもそも美術に唯一の答えもなく、定められた到達点もありません。表現者がおかれた環境に根をはって、過去と対話し、同時代の息吹に触れながら、一人ひとりの表現を追い求めるところに充実があります。そのためにも、自他への強い好奇心やみずみずしい感受性、そして表現に向けた主体性や能動性が身につけていなければならぬでしょう。

そういえば幼稚園の砂場遊びは、絵を描くことによく似ています。自分の想いが事物



を媒介にして形となり、そこからまた想いが発展する、それは創作活動の核心です。砂場の園児に刺激されたわけではありませんが、私が一年目に手がけたことに築山づくりがあります。大きな築山があれば、これまでなかった遊びが誘発され、身体機能の発達が促されるということで、PTAの協力のもと二度の造成作業で40tの土を入れ、二つのピークをもつ築山を設けました。美術畑の園長ということで、形の美醜にいささかの配慮はしましたが、何より園児が思わず登りたくなるような小山であることを目指しました。また二つのピークの間にテラス的なスペースを設け、遊びの広がりを期待しました。難しかったのは高さや傾斜からくる遊びの多様性と安全性との兼ね合いで、その点については、30tの土を入れた最初の造成で、低めの高さ、緩めの傾斜とし、遊びの様子を四か月ほど観察した後、二度目の造成で、より高く、やや急な傾斜の築山としました。予想外のこととして、同じ土を盛ったはずなのに、後から入れた土の締まりにくいことがありました。風雨や園児の活動で築山はおのずと姿を変えていくと思っていました。その見通しが甘いことにすぐ気づかされました。子どもたちは表面の亀裂に砂場遊びのシャベルを差し込み、斜面を掘り崩し始めたのです。見上げるような小山を崩すことは、幼児にとってどんなに手応えのある大仕事でしょう。また二学期に園庭開放を行いました。その大きな山に、おぼつかない足取りの未就園児が挑戦し、中腹から、下で待ち受けるお母さんがけて駆け下りていったこともうれしい誤算です。

ところで、幼稚園での造形活動への私のかかわりは、いまだ、ささやかな実践しかな



い状態です。これまで数回行った「土粘土コーナー」、また学年末の生活展における「お絵描きコーナー」といったところでした。しかし、それでも感嘆すべき粘土作品、また大胆で伸びやかな絵の数々に出合うことができました。造形活動の特色として、新しい素材との出会いによって新しい感覚が芽生え、活き活きとした表現に結びつくということがあります。人によっては新しい素材に戸惑いを覚えることもあるでしょう。そんな場合でも造形活動には、制作を繰り返すうちに素材になじみ、また感覚にも弾みがついて、イメージがイメージを呼ぶといった作用があります。たとえば、絵の具と太い筆を用意すると、それに不慣れな幼児であっても、やがていつものクレヨンやマーカーと違う、色の美しさや筆のおもしろさになじんで、近代絵画の巨匠のような迷いのない描線を楽しむようになってきます。

私にとって難しいのは、造形活動のさなか、幼児のその時々々の心のサインをキャッチできるかということです。印象的な例としては、「園長先生のお絵描きコーナー」を設置した時のエピソードがあります。そのコーナーは、段ボールを組み合わせた10mの内壁をもつ小部屋状のものでした。保育時間中の作業でしたので、何人かの幼児の、手伝ってくれているのか邪魔を楽しんでいるのかわからない出入りの間、一人の年長児N子だけが、ずっと手伝ってくれました。壁面が完成し、白い大きな紙を貼りめぐらせた時、その場にいたN子が誰よりも早くクレヨンを持って画面に向かったのですが、あろうことか、10mの壁面に大きなト音記号を幾つも幾つも書いたのです。翌日には筆と絵の具





を準備し、新しい紙で場を整えたところ、真っ先にやってきたのがN子でした。N子は筆をタクトのように持つと踊るようなそぶりをし、そして筆を紙に当て、壁一面に波打つように線を引いていったのです。そしてひとしきりそんな振る舞いをする、何事もなかったかのようにほかの子と一緒にたってお絵描きを始めました。画家の中には新しい作品を作る際に画面にまず染みをつける、彫刻家であれば素材の石にまずはドリルで穴をあけるなどの「儀式」をする人がいます。N子の場合、それは大きな画面を前にした時のうれしさの表れ、それとも、私が行いを制止するか否かを無意識のうちに試していたのでしょうか。あるいは、気持ちをお絵描きにシフトする「儀式」のような振る舞いだったのでしょうか。

そのように、ひと口に造形活動といっても、一見「造形」には見えない表れもあるでしょう。また心のどこかにブレーキがかかっているかのように、活動の波に乗れない子の存在も気になるところです。いずれにしても、そのほか、幼児の造形との出会いは、私にとって新鮮な発見があって興味はつきません。いわゆる図式画期の記号のような絵であっても、そこには喜びの感覚が宿っています。結果としての見栄えの良さに傾斜する作品主義の弊害はいうまでもありませんが、感性が育ち、造形への衝動がわき上がるこの時期の表現がかけがえのないものであることを思えば、幼年期の心の躍動が形として残る「作品」の意義について再考すべきではないでしょうか。

(静岡大学教授・静岡大学教育学部附属幼稚園園長)



## いま、倉橋と出会う

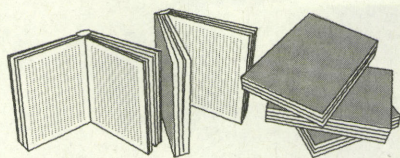
倉橋惣三（一八八二—一九五五）は子ども・保育研究の先駆者であり、日本の就学前教育における遊び児童中心主義を確立したといわれる。著書に『幼稚園雑草』『就学前の教育』『幼稚園真諦』『子供讃歌』などがある。大正期から戦後にかけて、本誌の編集主幹を長く務めた。没後五十五年を迎える今年、特集「いま、倉橋と出会う」を企画した。倉橋の珠玉の言葉や一節を手がかりに、身近な保育実践を振り返り、現代の保育観を問いつつ機会にしたい。倉橋と同時代に生きた研究者、保育者へのインタビューも紹介する。

### 何にもしない

泣いている子がある。涙は拭いてやる。泣いてはいけなという。なぜ泣くのと尋ねる。弱虫ねえという。……随分いろいろのことはいいもし、してやりもするが、ただ一つしてやらないことがある。泣かずにいられない心もちへの共感である。

お世話になる先生、お手数をかける先生、それは有り難い先生である。しかし有り難い先生よりも、もっとほしいのはうれしい先生である。そのうれしい先生はその時々的心もちに共感してくれる先生である。

泣いている子を取り囲んで、子どもが立っている。何にもしない。何にもいわない。たださみさも悲しそうな顔をして、友だちの泣いている顔を見ている。なかには何だかわけも分からず、自分も泣きそうになっている子さえいる。



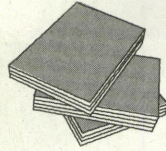
# 「何にもしなう」

— 「廊下で」より —

江波諄子

『倉橋惣三選集第三卷』（倉橋惣三著 フレーベル館 一九六五年）、「育ての心—子どもたちの中にいて—」に収められている五十編の珠玉の散文のうち、四十八編は昭和六年（第三十一巻第一号）から昭和十一年（第三十六巻第十二号）の『幼児の教育』の巻頭言を整理して載せたものである。元の文章がどんな順で掲載されていたかを知るのも興味深い。

「廊下で」は、昭和十年の十二月号（第三十五巻第十二号）の巻頭言であるが、選集では、昭和七年の五月号（第三十二巻第五号）「こころもち」の直後に出てくる。つまり、実際には「廊下で」は「こころもち」より、およそ三年半以上経って書かれたということになるが、これは、双方の内容が極めて類似しているからかと思われる。



巻頭言には、倉橋の教育の根底にある揺るがぬ哲学が、表現を変え、繰り返し述べられている。今回の「廊下で」を語るに際して、筆者はさらに別の巻頭言に強く惹きつけられた。それは、初回（第三十一巻第一号）の巻頭言「人間教育」の次に載る、第二回（第三十一巻第二号）の「裁く勿れ」という文章である。残念ながらこれは、選集には収められていないので、ここに引用する。

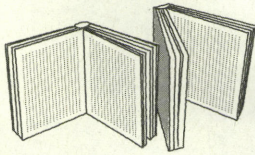
### 裁く勿れ

教育は育てることである。育てるということは、個性の外に行われるものではない。この意味に於て、教育は絶対に個性に即して離れないものである。

教育は理想をもつ。理想は普遍性から個性を批評する。それは当然である。又、教育は方法を用いる。方法は適法を選ぶの為に、個性を検討する。それは素より必要である。

しかしながら、教育が個性に対して執り得る態度は、之れ以上一步を越ゆることも許されない。与えられたる個性を正面に凝視する外、少しでも、之を裁くべき権能はないのである。評価も査定も、方法の中のことである。心を動かして人の子を裁くことは、あなたが教育をやめない限り、許されないことである。

裁く心、それは我が個性を以て他の個性を拒否しようとする心である。絶対に個性に即して離れない教育の心と、全然並び居ることの出来ない心である。



相手が小さな幼児なるが故に、少し位裁いたとて小さな罪だなど、思ってはならない。(『幼児の教育』第三十一卷第二号 昭和六年 旧仮名遣いは新仮名遣いで表記)

数多の情感的な文章の根底に、倉橋の強靱な哲学がある。特に、「裁く心、それは我が個性を以て他の個性を拒否しようとする心である」の行は、われわれ人間すべてに対する警告とも受け取れる深い示唆である。子どもを育てるためには、いろいろ教えていかねばならないというような感覚が日々の生活の中にあるならば、この文章を改めて読み直してみたい。

さて、「廊下で」に戻ってみよう。

幼児期は自他の境が緩やかなため、周囲の人や物語などへの感情移入も流動的である。そのことを大人は、粗雑に考えてはいけない。むしろ、われわれも心がフル稼働するよう日ごろから研ぎ澄まさないといけない。

誰の目にも見えるような、測りやすい行動が評価されがちな昨今、ある状況の中にあって、実は心の中がぐるぐると激しく、または、深く、深く、奥深くしみ入るような何かを感じているため、次の行為が表出してこない、つまり「何にもしない、またはできない」という「間」は何だかとてもなく大切な時間のように思える。

(常磐大学教授)

# 人をないがしろにしない、保育という思想

菊地知子

「廊下で」に初めて出会ったのは、大学一年時の授業でのこと。それは文字としてよりも、読んでくれた恩師の声で、私の中に残っている。そしてそこに描かれている「何にもしない。何にも言わない」子どもたちの姿に共感し、そういう子どもたちのそばに、子どもたちの仲間として、いられる者でありたいと、願い続けていま、ここに立っている。

## 大人の成長

私にとって「廊下で」は、保育者と子どもの物語であるよりも、大人にこそ突き付けられる、何を大

事に思つて、どう生きるかを考えるためのテクストの一つである。実直を通り越し、純朴や朴訥であることを通り越し、愚直で時に愚鈍でさえあるような人の姿の中にこそ、私は「真の大人らしさ」を見ようとする。そして自分自身も少しでもその域に近づくことが、人間としての、こと後半生の、成長の名に値する発達ではないかと感じるのである。逆説的に響くかもしれないが、真の大人として思い描きうる姿は、子ども以上に子どもの的である。妥協や打算、とりわけ対他者的に、恣意とか作為をどこかでそぎ落として在る、そんな姿である。その故もあり、

「廊下で」中の、「何にもしない。何にも言わない」で、泣いている子のその生を自らも生きてしまいう子どもたちの姿には、憧れにも似た尊敬の念を起こさせられる。これはもしかすると私一人に限ることではなく、この文章に触れたものであるならば、倉橋が言うところの「うれしい先生」でありたい、との思いを、おそらく強くするであろうし、そうであろうとしているという自負も、もたなくはないだろう。

このような指向性は取りも直さず、何にどのような役立つかを自らに問うことや技能や能力を高めることよりも、「ただその人として在る」ことを大事に思うような、実は意外に守旧的に教養主義的でありうる保育の思想を支えるかもしれない、とも思う。

しかし待てよ、と一方で思う。涙を拭いてやり、泣いてはいけなしいい、なぜ泣くのと尋ね、弱虫ねえ、と言う、そのこと、あるいはその人にも、さもあるうとの親愛の情と尊敬を、私は感じる。誰よりもその子を知っている、誰よりもその子を守って

いる、というそのまっすぐな自信は、まぶしい。実際、倉橋はそのような保育者を「有り難い先生」と称している。その場その時の保育を、すべての人間を代表して担ってくれている「有り難い先生」には現実としてなろうにもなり難く、あまつさえ批判しいい謂われは誰にもどこにもない。文字通りただただ有り難い。子どもに、立ち直れないような嫌な思い、つらい思いをさせようという邪悪な気持ちでないなら、受け止め方とか伝え方は、いまここでこの時の保育を担っている、ということに比すれば、ごくごく小さなことなのではないかと思う。

そうでありつつ、なおも「何にもしない。何にも言わない」で傍らに居る子どもたちに魅かれる思いを問うてみる。彼らは、「痛かろう」「つらかろう」「さびしかろう」挙句は「かわいそうに」などと感じていたのではない。自らが身をもって痛く、つらくさびしいのであり、「かわいそう」などとある種の評価的感想をもったりはしないのである。子ども

と同じ地平を生きることが私たちにはもはや容易ではないが、子どもの心もちに触れて（共感して）、「そうなんだよね」と了解する。その上で、諦めや放置や放棄でなく、その生を生きることができるのは、ただその人であることも了解していかなければならない。その痛みを自らの痛みにすることができればその方がどんなにか楽、と、特に人の親ともなれば思うことも多かろうが、そこはその子が生きなければならぬことを、大人として、保育者として、了解した上で居なければならぬ。床に置いたその子の手を、よもや自分が、あるいは誰かが踏んでいるのであれば、気づいてすぐにどかして詫びるなり、あなたの足が子どもの手を踏んでいる、と気づいてもらうことが必要なことも、まますま生じるかもしれない。何よりもまずその人が生きて在ることを大事にする、ということ、決して蔑ろにしない、ということが、保育の思想なのだ、ここでも思う。「蔑ろ」とは、「無いが代」、すなわち、無いことと

同じにする、無化する、ということだという。保育とは、その子が生きて在るということを、決して無いことにしない、無化しない、すなわち蔑ろにしない、ということに重きを置く営みであるように思う。

### 共に生きるということ

私は長く、私自身の生活の場で、仕事ともプライベートともつかぬ中で人や子どもと出会い、巻き込み巻き込まれて過ごしてきた。幼稚園や保育園といった、子どものためにと心地よく設えられた場への素朴な尊敬の気持ちを失うことはなかったが、子育てや保育をまさしく日常実践として、地のまま素のままやってきたという自負もある。自分の産んだ子どもたちには、温かい寝床と、飢えないだけの食べ物と、身につけて嫌じゃない程度の衣類があれば、後は何とか、それほど不幸ではなく生きていくだろう、という確信めいたものもあった。たまたま私の所に来てくれたその人たちだとしても特別にち

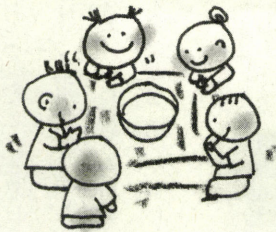


やほやする気も起こらずに、世界中のどの子どもにもそのくらいの「不幸でなさ」が保証されることを願いながら、それでもとかく目の前で生きていてくれる人たちに、せつせとおいしいものを作っては食べさせる、そんなふうになんと共に過ごしてきた。

M男は、そんな生活の中で出会った子どもの一人である。とある伝手で、彼は四歳後半から、小学校入学までの週日は毎日、うちに来ていた。わが家の末っ子のY子よりも一歳半、学年で一つ上だ。やんちゃで明るく、気は優しいけれど譲れないところもきちんとあるM男は、複数の食物アレルギー反応があり、アナフィラキシーで呼吸困難になったことも一度ならずあると聞いた。食べられないものを数えればいろいろあったが、食べられるものの方が断然多く、幸いうちの子どもたちはM男の食べられるものはすべて食べられたので、私はただ、M男が食べられる食材で家人みんなの食事を作ればよかった。うちに遊びにくる子どもたちも、その親たち

も、M男の食については何ら違和感なく心得ていて、M男の身体が受け入れれない小麦も卵も使わずに作ったケーキを誰かが差し入れてくれることなども日常的であった。

ある時、娘のY子の友人F子の家に、M男共どもお邪魔することになった。集まった五人の子どもの中には、F子やT男のように、M男と懇意の子どももいたが、そこでM男と初めて出会うZ子もいた。Z子は、発語はあるけれどまだまだたどたどしく、言葉で伝わらないもどかしさからか友達をたいたり、髪を引っ張ったりしてしまうこともままあった。この日、子どもたちと白玉粉をこね、F子の母と私とでゆでて、さておやつにしよう、というころ、Z子の母が、友人宅へのZ子のお呼ばれがうれしくて初めて焼いたのだ、とクッキー



を持つてやつてきた。F子の母は一瞬、M男のアレ  
ルギーに気を使ってか受け取るのを躊躇して私を見  
たが、私は即座に、「M男は（一人食べなくても）

平気だから」と言った。そのやりとりを知つてか知  
らずか、子どもたちで小さなテーブルを囲んでいざ  
おやつ、という時にM男が私の所に来て、「M、い  
ま、何にも食べたくない」と言った。M男が一番張  
り切つて作つた白玉団子のことがちらりと頭をかす  
めたが、「うん。そしたらさ、Mは食べないで遊んで  
たらいいよ」と応え、私は母親仲間三人とお茶の席  
についた。Z子は、おやつに専念する気持ちになれ  
ないのか、食べ歩く。母は「Zちゃん、遊ぶのは食べ  
てからにしようよ」とたびたび声をかけ、本人の両  
肩を抱くようにして席に戻す。戻された何度目かに  
Z子は、テーブルの上の磁器の皿で、背後に居たM  
男の頭を一撃した。私はそれを目にした瞬間に、不  
覚にも涙がドツとあふれ出てしまった。M男にクッ  
キーを食べさせられないことや、M男が楽しみなは

ずのおやつを自ら食べないと言つたことを私は心の  
どこかでは気にして、あふれる寸前まで、涙が  
たまつていたのかもしれない。たたかれたM男の痛  
さによりも、涙が出てしまったことに取り乱した。

「Zちゃん、お願い。Mをたたかないで」と、何の  
分別も判断もないまま言つた。Z子の母が傷つくか  
もしれない、と思つたのは言つてしまつた後だつ  
た。当のM男は、座つて遊んだ姿勢のままススッ  
とひぎで歩いて椅子に座る私の足元に来た。口を左  
右にギユツと開いて目も見開いておどけたような顔  
をし、目をしばたたかせていたが、「M、痛かつた  
よね。ごめんね、ごめんね」と私が言うや、ほろほろ  
と両目から涙をこぼしだした。Z子の母とF子の母  
は、優しくZ子を説教（なだめ？）にかかつている。  
T男の母は、私の隣の椅子で、なぜか私にもらい泣  
きしている。Y子、F子、そしてT男は、誘われる  
ようにM男についてきて、三人ヒシとくつついて、  
眉間にしわを寄せ泣きそうな顔になっている……。

みんながみんな、大真面目である。私はふっと、この真面目さゆえの諧謔かいぎやく味を感じ、胸の内から今度は笑いがこみ上げてきた。こんなことで、こんなところで涙を流してしまふなんて、私はなんて大人気なくみつともないんだらう。健気に身を寄せる子どもたちに、私は感謝こそすれ、からかう気持ちなんて微塵もない。なのにどうしようもなくおかしい。おかしくていとしくてたまらない。お皿でたたかれたことと、たたかれたM男にしかその痛みや悔しさが乗り越えられないことは理不尽で気の毒だけども、ほかの子から見れば少しだけ年長のM男が泣いたことも、何だかめでたいことのように思えてくる。Z子と母はこれからも限りなく向き合わなきやならないけれど、「さあどうしようね」と一緒に困り果てたり悲しんだり、時に喜んだりする仲間がいて、つながりがある。何かが解決したわけでも意味を見いだせたわけでもない。ますますごちゃごちゃした中で、他者とただ共にあることを決意のすべて

としつつ生きる姿だけがある。「子どものため」の思いが行き過ぎ一人歩きをすれば、ほしいと願うものを目の前に出してしまふようなおとぎの国にもなるかもしれない。けれど、否、だからこそ、そうするのではなく相変わらずごちゃごちゃで、大概のことは意味不明のまま生きる生活の中にこそ、他者と共に生きるしかない実感を得る。

つまりは、誰も、誰のことも蔑ろにはしていない。時に寄り添い、時に離れて、気にしたり心配したりし合つて、滑稽なほどである（ちなみに、気にすることも心配も要はSenseである）。

「廊下で」の中に描かれた「何にもしない。何も言わない」、そして、人を蔑ろにすることをしない子どもたちに、恥じるようなことをしてはいないか、仲間と思われるに足る自分自身であるか。恩師の声は、生きる場を変え、時を変えても変わらずに、これからもきつと、語りかけ続けてくれるだろう。

（お茶の水女子大学幼保プロジェクト）



## 追想 倉橋惣三先生と坂元彦太郎先生

# 「坂元君、幼稚園は援助だよ」

林 健造

(聞き手・構成 浜口順子)



林健造先生は画家であり、幼児造形教育研究者でもある(本誌第八十九巻と第一〇七巻の表紙の絵は、林先生の作)。一九一七(大正六)年生まれで、今年九十三歳。

一九五四(昭和二十九)年、お茶の水女子大学(以下、お茶大)教授の坂元彦太郎(一九〇四〜九五)に招かれ、金沢大学からお茶大附属小学校に図工科教員として赴任、同大学でも教鞭をとられた。一九七四(昭和四十九)年、十文字学園女子短期大学(以下、十文字短大)に移り、同附属幼稚園園長も務められた。

坂元は文部省初等教育課長として、連合国軍総司令部

(以下、GHQ) 民間情報教育局と討議しつつ、一九四七

(昭和二十二年)に公布された学校教育法に幼稚園を「学校」として規定する条文を起草した人物であり、「倉橋惣三・

その人と思想」(フレール館)の著者でもある。林先生は倉橋惣三がお茶大を辞した直後に同附属小に着任されたので、倉橋と面識はないが、坂元を通して倉橋の話をよく聞いたという。林先生のかかわっていた創造美育運動に、倉橋惣三の思想の影響が大きいとも語られる。

本稿は、林先生書き下ろしの原稿とインタビューを基に浜口が構成したものである。

## 幼児教育は援助だ

倉橋先生と坂元先生の関係で深く記憶しているのは、戦後の学校教育法制定の過程のことです。

アメリカの占領軍の下で日本が教育改造を進めていた時、日本代表は英語の達者な坂元先生でした。

第四十二回の日本保育学会大会（於、十文字短大一九八九年）において、坂元先生はその辺のことを記念講演でお話しされています。

GHQ民間情報教育局との会議の前日、坂元先生は自分の原案をもって兄貴分の倉橋先生にご相談にうかがったそうなのです。私はその夜、「林君、すぐ校長室へ！」と呼ばれたので、急いで駆けつけました（坂元先生は当時、附属小学校の校長でした）。「いよいよ明日だ、何日も新日本の幼児教育という題でいろいろ考え、案を練ったが、今日午後、倉橋先生のお宅にお訪ねして、このプランを御覧いただき、考えを申し上げた。教育の大原則は人の子

を人が立派な人に育て上げること、それにはフレール先生のおっしゃるように、まず、子どもをとりまく環境を整えることが第一と考えることを伝えたい」というお話でした。その時、倉橋先生は「坂元君、幼稚園は援助だよ。援助。教育を先頭にもってこないこと……」と言われたそうなのです。

## 倉橋の造形教育論

大正十年ごろの話、倉橋先生がなじみの呉服屋さんの長さんと会います。

倉橋「おや、今日はお出かけ？」

呉服屋「はい山城屋さんの坊ちゃんに絵のお手本を届けに」

倉橋「絵って、どんなお手本」

呉服屋「はい七福神です、いい絵ですよ」

倉橋「オイオイそんなお手本、坊ちゃんにあげるのはだめだよ」

呉服屋「とんでもない、子どもは手本がなければ絵

は描けませんよ！」

倉橋「子どもは手本などなくても描くものはあるよ。大人が手本などやるからダメになるのだよ！」

呉服屋「エ、そんな」

倉橋先生は臨画（お手本のとおりを描く）を極力否定しておられたのです。それなのに、世の中の幼稚園では、「ぬり絵」がかなり盛んになっていくという矛盾がありました。

### 坂元先生の「臨機保育」の話

坂元先生の保育論では、こんな話を思い出します。

ある朝、「カメが赤ちゃんを産んだ、どうしよう」という連絡を受けて、ある幼稚園の園長先生が急いで保育室に駆けつけました。そうしたら驚いたことに、そのクラスでは先生と子どもが一緒に折り紙をしています。角と角が合わないでいると、「まっすぐに折るのよ」としかられたりしています。それより、カメの赤ちゃんと出合って「あ、かわいいな！

私も赤ちゃん育てたいなあ！」と、なぜ心を響かせないのでしよう。四歳児の心や感性に迫るものが、タライの中の親子の生命（いのち）にたくさんたくさんあることでしょう。

坂元先生にこの話をしたら、「臨機応変という言葉があるだろう、折り紙とカメの赤ちゃんを比較して、今日の活動はどちらが子どもの保育にとってプラスか考えられる保育者でありたいね」と。「子どもってその瞬間瞬間が大事なんだ、その時をはずせばもう次の楽しい遊びを自分で見つけて遊んでいるものだ……」とも言っておられました。

私たちはしみじみ臨機保育の大事さを知り、実習生の間でもこの言葉に救われる者がたくさんいました。それから「坂元臨機保育」という言葉は、保育界でよく使われました。

### 自己伝達するということが大事

一九八九（平成元）年に改訂された幼稚園教育要

領で、倉橋先生の考えが大きく取り入れられたとよく言われます。実際はどうなのでしょう。私は、現代の表現教育の問題を考えてみたいと思います。

五領域となつて、その名前の一つが「表現」になりました。それ以前の教育要領で、保育内容は「音楽リズム」と「絵画製作」が分かれていたので、いまより一つ多い六領域でした。私は「造形」という言葉がいいと考えていたのですが、今度は「表現」です。幼児には親しめない言葉でしょうね。四歳の子が、「ぼく、幼稚園で一番好きなお絵描きじゃないよ、表現だなあ」と言うのは想像できません。表現の「表」は「あらわす」。人にわかるように説明するというのはこちら。「現」は「あらわれる」だから、あらわれてびっくり、驚く。この二つの意味が入っています。

「表出」と「表現」は違います。赤ちゃんが泣くのは表出。自分で終わっている。ピアノに上った幼児が足をばたばたさせるようなことまで表現と言つて

いいのか。それで教育でしょうか。

表現において、「伝達」ということが大事です。つまり、伝えるということ。役者がさめざめと泣いたり、お能で顔を隠したりすると「ああ泣いているんだな」と伝わる、これは表現。こういう、人にわかるように伝えるのは「他伝達」です。

それから、表現には、自分自身に伝える「自己伝達」というのがあります。これを忘れている先生が多いのではないのでしょうか。

子どもが絵を描き終えた時、「先生！描いたあ、見て！」と見せに來ます。先生は「あら描いたの。ほう、いいじゃない？描いた人はあのお机に出してお庭で遊んできてもいいよ」。こういう評価だけしていたのでは、子どもの心や感性の伝達ができません。どこがいいのか指ぐらい当てて「この花のところ、先生は好きだなあ！赤い花がとつてもきれい！」と言えば、あ、先生ちゃんと見てくださったのだと、子どもの喜びも倍になるでしょう。

子どもが先生に絵を見せる前に、何かブツブツ言っています。「ママのおめめ、小さかったなあ、ほんとは大きいよ。怒るとこんなに大きんだからあ」。ブツブツまだ何か自分の絵を指さしてつぶやいています。これは鑑賞（自作の評価・反省になる）行為で大事なことです。先生はそのツブヤキに参加して、「ママの目、これ、とつてもかわいいわよ！ この目、好きだな」と手を触れたり、二重丸でもつけてやれば、子どもの絵を描く喜びの心が育つでしょう。机の上に出してさあ遊んでこい、ああいいね、では何も育ちません。

私が園長をしていた十文字短大附属幼稚園で、父の日の参観日にパパの絵を描くことになりました。A君はパパの顔を全部青色で描きました。「あらあこれいいの？ 青いお顔で」とA君に聞いたら、A君は飛んできて「あ、これでいいよ！ 朝ごはんの時にママが『あらパパ、お顔青いわよ、昨夜お仕事遅くまでしてたから、会社で気をつけてね』って。

ボクも見たけどホントに青かったんだからあ！」と真剣な顔で話してくれました。こういうことも自己伝達をきく大事な点だと思えます。

靴屋さんで親は安いほうの運動靴を買おうとしているのに、子どもが「こっちのほうがいいなあ」ということ、これも自己伝達としてとてもうれしい。その表現をきくこと（買ってやるとは限りませんが）も豊かな関係を育てます。

### 展覧会のあり方

園の展覧会の日、「よしおの絵、どこなのか？」と親が聞きます。「ええと、どこだっけ」……。先生が「よしおちゃんのあれでしょ」と言うと、よしお君は「あれー？」。どうも覚えていない様子。先生も親もがっかり。これでいいのでしょうか。

自分の描いた絵をいったん遠くに離して見る。これは大事な体験です。幼児は、夢中で絵を描く時、紙からせいぜい10cmか20cmのところまでしか顔を離



していません。だから、その絵をそのまま先生に出してしまうと、壁に飾られた時、それは別の絵になっちゃってしまっていて、自分の絵かどうかわからないということが起こるのです。

自己伝達は、自分の表現を鑑賞することを促すことで実現されます。それも子どもから楽しく自然にそうすることが大切です。「遠くに離して見るのですよ」と言うのではダメです。たとえば、子どもが絵を描いたら、床に描いてある円の中に入る。そこから少し離れたところにはイーゼルが置いてある。そうすれば子どもは遊びのように、イーゼルに自分の絵を置いて改めて見ることを楽しむでしょう。

私は長く子どもの絵について考えてきましたが、最近つくづく思うのです。幼児の自己伝達の部分を、先生が少なくなっているのではないかと。展示する絵を、展示の仕方を、子どもに選ばせているのでしょうか。私は赤い紙の上に貼りたいな、僕は青い紙の上がいいな。これが「よしおの絵！」と、自分

のやったことがちゃんとわかる、子どもが主体になっている展示会をしてほしいなと思います。

「パパの顔が青いのは変だねえ」とか「この絵は何を描いたのかな。ライオンかあ」と決めてしまうのは、他伝達の部分ばかりを見ている先生の姿です。しかも他伝達の答えが一つだと考えてしまうことが大きな問題です。

幼児は三歳から四歳に移るころ「自分でえ！」という言葉を言います。親が手を出すと、最後の言葉を高め「……でえ」と叫ぶ。パンツをはく時、靴をはく時、粘土で遊ぶ時、胸のボタンをかける時。してもらっていた時代を卒業し、自分の考えたやり方でやるからいいよと成長した証しです。私も死ぬまで新しく生きたいなあと 생각합니다。「自分でえ」という気持ちです。

(画家・十文字学園女子短期大学名誉教授)

構成・浜口順子(お茶の水女子大学大学院准教授)



# 園のくらしを育む 3

## 幼児とアート(1) —アート経験を支える居方—

秋田喜代美

### 1 アートする経験

「アートを経験する時、私たちは経験している内容を能動的に解釈することにかかわっている。探索的にみることを刺激し、知覚を研ぎ澄ませ、ビジュアルインテリジェンスを喚起する」(Goodman, 1976)。<sup>註1</sup>これは、私の好きなNelson Goodmanの言葉です。子どもの知性を大人は子どもの語る言葉や出合う言葉の経験とつないでとらえがちです。ですから、Aちゃんの行為そのものよりも、こう語ったということを知ることの現れとしてとらえたり、言葉でさまざまなことを教えようとしたりすることが多くなるといえるでしょう。


しかしどの子も、言語的なインテリジェンスだけではなく、直観的に美しいと感じたり、直観的によいと感じたりするビジュアルな感覚をもっています。また、何か言葉ではなくさまざまな動きとその痕跡で表現してしまいたい欲求や、そのほうがびったりくる感覚を

子どもはもっていると思います。そこに、その子の根源的な存在としての表現欲求があります。大人がそれをどう受け止め、そしてさらにそれをどのように意味づけ価値づけられるかが重要ではないかと思えます。それが、子どもが「知覚を広げ、新たなつながりと対比をもたらし、経験を構造化したりしながら、新たな世界を創り出したり、また見直したりしていく」(Greene, 2001) 註 ことにつながっていくからです。

善悪ではなく、美しい、端正である、整っているなどの、あるまじまりのよさや、それに対して自分という存在の介入によって意図的に壊してみたいという思いや、子ども自身も自覚化できていない感情につき動かされて、動き出す行為の意味に大人が向き合うこと。これが、すでにもっていた見方を越えて、子どもと真に出会える瞬間であり、わかっているつもりの子どものもつとわかろうと問い始められる時になります。そしてそのことは、保育者がどのように言葉をかけ働きかけるかという議論以前の、子どもを感じ、子どもと共にいる居方を示してくれるようにも思います。子どものアートの経験を意識することは、子どもの新たな可能性の発見につながり、日々の保育に違う視座を示してくれます。それは描画、造形、音楽という境界区分で活動を見るのではなく、アートとしての経験であることが大事でしょう。


## 2 保育者の居方

私が毎年研修に入れていただいている林間のぞみ幼稚園(神奈川県)のベテランの保育



者が、故大場牧夫先生の実践から学んだこととして私にお話ししてくださった印象深いエピソードがあります。みんなで花火を見てきた時に、「昨日見えてきた花火を描きなさい」と言うのではなく、黒い画用紙を配って「君たちに夜の空をあげるよ」という言葉を咄嗟とっさに言われたそうです。また、みんなで育てた花の種を付けて風船を飛ばした時に、そのことを思い出して描こうとした子どもに「青い空をあげるね」と言いながら、青い画用紙を出してこられたそうです。素材を子どもたちに手渡す時から、その子どもの想像の世界に子どもの目線に入れる保育者の感性に、私は心動かされました。

初夏に、その幼稚園の園庭では、ベニヤ板を立ててそこに貼られた紙に自由に塗りたくりをしていました。子どもたちは黄色一色で、筆で好きにいろいろ塗りたくっています。ある程度やりますと、中には紙が真黄色になりつまらなくなってきた、今度は垂れてきた絵の具が土と混ざることがおもしろくなる子どももいました。その時に保育者はどうかかわるのかなあと思ってみせてもらっていました。「おぼけが飛んできたよ」と担任保育者がそこに一本青い線を入れました。それが子どもにとっておぼけに見えるかどうかはわからないのですが、その途端に子どもたちの動きは変わりました。そこに、子どもの表現や物語の世界を広げてくれる保育者と、「遊ぶんじゃないよ」と統制的になる保育者との違いがあるのではないかなと感じました。その時子どもたちは、一枚目は単に紙に色を塗っているという素材との対話を楽しむだけでした。たいがいの実践ならば、この一枚の用意された紙で塗りたくりは終わりです。けれども、そこではもうちょっとやろうと、保育者




がその一枚をはがしてまた新しい真っ白の紙をそこに貼りました。二枚目になると、子どもたちの中に表現したいものへの計画性が出てきました。

一枚目は「好きにやっていいのよ」と言われて好きに塗りにたくって、まずはものや表現の媒体がどういうものであるのかという感覚を子どもたちは楽しんでいました。その活動のある程度やり切った時に、今度はどんなものを描きたいのかということが子どもの中から出てくるプロセスがありました。二枚目を準備するという、表現の生まれる過程への保育者の見通しと共に、まずはその前に十二分に子どもが素材とかかわり、塗る技を子どもなりに十二分に経験できる環境を準備し、傍らで見守ることが保育者にできるかが、「アート経験」になるのか、「塗りにたくり」活動なのかの分岐点なのではないかと感じた瞬間でした。この用意すべき紙は、いつも二枚で終わりとは限りません。むしろ何枚も何枚も要求されることもあるでしょう。あるいは、ほんの少しで、全部終わらなくてももう十分となることもあるでしょう。同行者として居るとは何か、それを子どもから問われるのが、アートの経験ではないでしょうか。

(東京大学大学院教授)


注

- 1 N. Goodman, *Languages of Art* (Indianapolis, Hackett, 1968; 1976)
- 2 M. Greene, *Variations on a blue guitar: The Lincoln Center Institute lectures on aesthetic education*. (New York: Teachers College Press, 2001)



# 保育園と児童館の一体運営から

## 見えてきたもの



石井 雅

### 品川区の子育て支援

の支援を通して、地域の子育て家庭に対する育児を支援しています。

品川区では、「子育て、親育ちを支援する」という基本方針に基づき、子育て支援を拡充・強化する政策を展開しています。その中で「在宅子育てを支援する拠点の拡充と情報の提供」を目的とし、家庭に引きこもりがちな親子が気軽に集えるように、地域子育て支援センターを整備し、子育て相談や子育て情報の提供を行うと共に、子育てサークルなどへ

その一環として、平成二十年度から、保育園と児童館を一体的に運営する「キッズ館」という、新たな地域子育て支援センターのしくみをつくり、就学前の親子を対象を特化した支援を行う施設が生まれました。

品川区には、一・二階が保育園、三・四階が児童館という施設が多くあります。「キッズ館」は施設

を新たにつくるのではなく、これらの既存の保育園と児童館を一体的に運営することで、保育園の保育・子育てのノウハウを活かし、児童館を訪れる在宅子育てへ、より専門性の高い、きめ細かい支援を行うことを目的にしています。平成二十年度から毎年二館ずつ、二十二年度までに六館の「キッズ館」を開設する予定です。

東五反田保育園と東五反田児童センターも、計画のさきがけとして、平成二十年度から保育園園長が児童センター館長を兼務する形で、「キッズ館」となりました。今回は、保育園と児童館を一体的に運営する実践を紹介し、児童館を利用する在宅子育て世帯と保育園利用園児、双方へのメリットを考えたと思います。

### 「キッズ館」東五反田の置かれている環境

品川区立東五反田保育園・児童センターは、JR

山手線五反田駅と国道一号線桜田通りに隣接した、都会の真ん中にある複合施設です。

少し歩くと、皇后陛下のご実家だった「ねむの木の庭」がある閑静な住宅街ですが、建物の周囲はオフィスビルに囲まれ、決して自然に恵まれた環境とはいえません。保育園に通うために保護者と子どもは、駅前の繁華街や交通や人通りの激しい道を、しっかりと手をつないで登園してきます。園の規模は、定員78名と小規模ですが、周囲に待機児童が多く、その解消のために88名まで、入所定数の弾力化を図っています（平成二十一年度現在）。また、東五反田保育園利用者は、フルタイムの勤務の保護者がほとんどであり、いわゆる九時から五時の勤務に残業時間を加えた保育時間を保障するため、朝七時三十分から夜十時までの延長保育を行っています。

児童館利用者は、ほとんどが幼稚園に入園する前の親子です。バギーを押して、激しい往来を避ける

ようにやってきました。近隣は大企業の本社移転などで、その後に多くの高層マンションが建設されています。都市回帰現象というのでしょうか、小さなお子さんを連れられた親子が大変多く見受けられます。マンションを購入し転居してきた親子は、地域との交流がなく、孤立しがちです。近くに赤ちゃんとお母さんが集うような公園もなく、公園デビューをする場所にも機会にも恵まれません。児童館は、「屋根のある公園」とよく称されます。東五反田児童センターにも、このような多くの「新米ママ」と赤ちゃんが訪れています。

### 「キッズ館」での実践

「キッズ館」は、就学前のお子さんとその保護者にターゲットを絞り、事業展開するのが特色です。また、保育園のもっているノウハウや資源を有効に活用することが求められています。

さまざまな事業を行っていますが、代表的なものを紹介します（左ページ表参照）。

このほかに日常的な交流も行っています。先述しましたように、東五反田保育園に在園している子どもたちの保育時間は長く、戸外に出られない雨の日などは、園舎内だけで過ごしているとイライラしてくる子どもも多くいます。そこで、児童館に遊びに行き、保育園にあるおもちゃとは異なった玩具や遊具で遊んだり、児童館の遊戯室で身体を動かして遊んだりすることで、イライラ解消を図っています。狭い所に大勢の子どもが長い時間いる保育園にとって、雨の日の児童館の有効利用は欠かせないものになっています。

上述のような時だけでなく、保育園の子どもたちが児童館に遊びに行く時には、保育士は、絵本や紙芝居、パネルシアターを持っていき、児童館で子どもたちに見せるようにしています。この時に、児童



## 【キッズ館で行っている事業（抜粋）】

事業名	内 容
子育て体験	保育園に来園し、子どもと同年齢のクラスに体験入室して、ほかの子どもとかかわって遊び、その姿を見て子育ての楽しさを保護者が実感したり、保育士の働きかけを学んだりします。
給食体験	親子で、保育園の子どもたちと一緒に給食を食べ、子どもの年齢にあった給食の内容や調理方法、保育士の食べさせ方を学ぶ機会となります。
生活支援型 一時保育 「オアシスルーム」	在宅で子育てをしている保護者が、リフレッシュ、通院、買い物、観劇、冠婚葬祭やカルチャースクール、さらに臨時的・短期間の就労などの理由で一時的な保育を希望する場合に、時間単位の一時預かりを行い、保護者の子育ての負担軽減とリフレッシュを応援します。
子育て講座	園長が子育ての楽しさや育児方法、子どもが過ごすのに適した環境や玩具の選定、遊び方について保護者に知らせていきます。
園庭開放・ プール開放	保育園の園庭やプールを園児以外にも解放し、一緒に身体を動かして遊んだり、泳いだりして楽しめます。
食育講座	保育園で毎年行っている給食に関する保護者会を児童館内で行い、保育園の保護者と地域の母親が一緒に参加します。保育園給食の人気メニューの紹介や調理の実演、試食などを行い、子どもにあったメニューや調理方法、離乳食の作り方を知らせます。
保育園行事へのお誘い	保育園で行っている行事のうち、七夕や夏祭り、やきいも、餅つき、クリスマス会、豆まき、ひな祭りなど、家庭でなかなか経験できない、伝承行事へお誘いします。

館に遊びに来ている親子に「一緒にどうぞ」と必ず声をかけ、仲間に入りやすいような工夫をしています。それをきっかけとして、保育園の子どもたちと一緒に歌を歌ったり、体操をしたり、ゲームをしたりして遊ぶことができます。

また、時には保育園の子どもたちが覚えた歌や合奏を児童館に遊びに来ている親子に披露したりもします。保育園の子どもたちには発表の場ができ、達成感をもつことができますし、母親たちは「こういうことができるようになるのね」と子どもの成長の過程を知ることができます。

家庭で子育てしている母親にとっての一番の関心事は、「わが子の発達は大丈夫なのかしら?」「来年幼稚園に入園しても平気かしら?」ということですが。保育園に通っている子どもたちと遊ぶわが子の姿を見るだけでも、母親の育児不安は相当少なくなります。



▲地域のお母さんと園児の保護者が一緒に「離乳食保護者会」に参加しているところ

親子で過ごしている場合と、同じくらい年齢の子どもたちと遊んでいる時では、子どもの姿はずいぶん違うものです。そして、このようなタイミングで保育士は保護者に声をかけ、会話の中から心配事や不安を引き出し、もし問題があればその解消を図ります。このような自然なかかわりの中での育児相談が大切であり、就学前の子どもの育児に関する相談については、保育士や看護師の具体的な援助と子育てに関するノウハウが活かされています。

### 「キッズ館」の成果と今後の課題

保育園の保育士たちが、自然な形で児童館の利用者にかかわり、援助をしていることで、育児不安の解消が図られています。また、保育園がもっている子育てに関する知識や技術を、講座だけでなく何気ない場面で活かすことで、児童館を利用する母親たちの子育て力の向上に寄与していると考えられます。

一体化運営の二年目からは、保育園の子ども地域の親子も参加する行事などで、役割を分担して、一緒に行事を運営するようにしました。そのような中で、児童館専任の職員と保育園の職員とのコミュニケーションがいつそう良好になり、相談場面などでの連携がスムーズに図られるようになってきました。

保育園の子どもも児童館の子どももみんな地域の子ども、また、お母さん、お父さんはみんな子育てを懸命にしている保護者だと、現在では職員がとらえています。このような職員の意識の変化に支えられながら、これからもいつそう「普段着の子育て支援」の充実を図り、地域子育て支援センターとしての役割を果たしていきたいと考えています。

(品川区立東五反田保育園園長・児童センター館長)



保育

の

創意工夫

6

## 雨の日の散歩

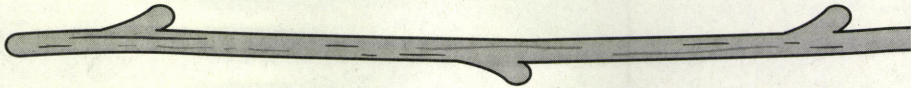
前原 寛

六月から七月にかけては、雨の季節です。うつつしい日が続きますが、特に鹿児島では晴れ間がなかなか拝めない時期になります。

個人的なことです。私は学生時代を東京で過ごしました。生まれ育った鹿児島と東京とはさまざまな違いがありました。カルチャーショックを受けた一つが梅雨でした。

上京して間もない六月から七月、ちょっと肌寒くて天気が悪いなあと思っていたら、いつの間にか梅雨明け宣言がありました。「えっ、いつ梅雨があったの?」と驚いてしまいました。

鹿児島では、梅雨は本当に連日雨が降ります。たまに陽光が雲の切れ間から

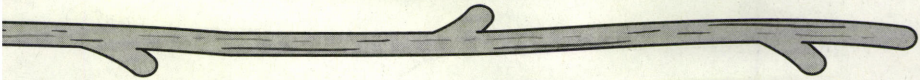


差し込んでくると、お日様がいたんだ、と思わず言いたくなってしまいます。また、梅雨明け間近になると、必ずと言っていいほど災害をもたらすような集中豪雨があります。土砂崩れがあつたり、鉄砲水が出たりして、やっと梅雨明け、本格的な夏を迎えます。

それが梅雨だと思っていたので、東京の梅雨には拍子抜けしました。さほどの降りでもありませんし、ごく日常的な雨の延長にすぎないように感じられたものです。

そのように鹿児島島の梅雨時期は、雨に降り込まれてしまいます。小さな子どもたちは、保育園の園舎からほとんど出ることもできずに、何日も過ごしています。おまけに、湿度も上がり、不快指数も高くなります。梅雨は、いかにして室内で心地よく過ごせるかということが、課題になる時期です。この課題に対する対応はきちんとしなければなりません。しかし、梅雨だから室内に限定されなければならないということはありません。屋外での活動を想定してもいいはずです。

私のかかわっている保育園では、年間を通して散歩を盛んに行っています。季候のいい時期など、〇歳児から五歳児まで全園児が散歩に出かけ、保育園に



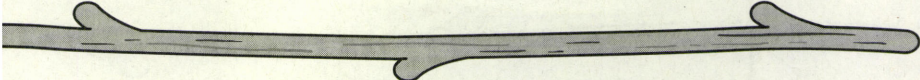
子どもが誰もいない時間帯があったりします。ただそれは、雨が降らず穏やかな日中の時です。以前は、雨が降ると散歩に行けないと思い込んでいましたが、そこで発想を変えてみると、雨だからこそ出合える環境があるのではないかと気づきました。

散歩という活動は、環境構成という視点から見ると、子どもの周囲の環境を構成するのではなく、別個の環境状況の中に子どもを連れていくということになります。つまり、園内では出合えない環境に出合つのが、散歩です。

そう考えると、雨の日に散歩に出かけられないと思ひ込む必要はなくなりま  
す。むしろ、雨の日は、ほかの日とは違う環境に子どもが出合える貴重な日であるといえます。

特に梅雨時期のように、何日も室内活動に制限され、園庭にもなかなか出られないような時こそ、散歩をする意味があるのではないだろうかと考え、雨の日の散歩を試みるようになりました。

もちろん、災害が起きるような大雨の日は論外です。子どもに無理のないと思えるような雨の日を選びます。また、三歳より小さな子どもたちには全く危険がないともいえませんので、必然的に年齢の上の子が中心になります。雨具としては、傘は扱いにくいので、雨がっぱを着ることにしています。足元は長



靴です。そうすると、両手が空くので動きやすくなります。また梅雨時期は、濡れてもさほど寒さを感じずにすむ季節ですが、散歩から帰ってきてからの着替えの用意は必要です。

そのようにして、梅雨時期に、五歳児を中心にして何回か散歩に出かけます。散歩のコース自体は、雨の降らない時と同じです。しかし、雨の日は、同じコースでも見せる装いが異なります。思いがけない所に水たまりがあるのを発見したり、雨に濡れた草花の様子を見たり、カエルを追いかけたりと、まさに雨の日ならではの環境が、子どものかかわりの中に現れてきます。いつもは水たまりに入らないように注意することが多いのですが、雨の日の散歩では特に注意する必要もありません。そうすると、子どもたちが水たまりでパシャパシャする行動は、あまり見られなくなるものです。

日常の生活には、晴れの日も雨の日もあるのが当たり前です。保育園での子どもの活動も同じです。むしろ、そこまで含めた時、子どもの活動が豊かになっていきます。

雨の日の散歩。梅雨時期をうつつとつしくいやな時期だと思つのではなく、その時期にしか出合えない環境があることを大切にしたいと思ひます。

(鹿児島国際大学准教授・元安良保育園園長)



発達心理学者の子育て奮戦記 (11)

それぞれの育ち

長田瑞恵

遊びの中の学び

わが家の娘は三歳八か月、息子は一歳四か月を過ぎました。わが家の子どもたちは特別な習い事には通っていませんが、遊びや日ごろの生活の中での自然なやりとりを通して、さまざまなことを吸収しているようです。

たとえば、私は一度も娘に直接的に文字を教えたことはありませんが、娘はかなり早い時期から文字

に興味をもち始めました。保育園への持ち物には全て自分の名前が書いてありますし、保育園とやりとりしているノートに毎朝母親が何か書き込んでいるのを見ているためでしょう。自分が描いた絵を持って「S(娘の名前)って書いて」とねだりにやってきましたり、ノートや雑誌などをのぞき込んで「これ、なんて書いてあるの?」と尋ねたりするようになりました。

文字に対する興味が特になくなってきた三歳七か



月のころ、私は娘の興味につながる遊びを取り入れたいと考え、娘と一緒に言葉の中の音を取り出す遊びを始めました。

私たちが話す言葉は音の連続です。そのため、言葉を構成する音の一つひとつを対応する文字に置き換えるためには、連続音を文字単位に分割し、音を取り出すこと（音韻的意識<sup>註</sup>）が必要となります。たとえば、「トコヤ（床屋）」という音を聞いて、それが「ト」「コ」「ヤ」の三つの音から成り立っていることが認識でき、真ん中の音は「コ」であると取り出せることが必要です。そして、文字習得の基盤として、この「音韻的意識」が不可欠であると言われています。しかし、「音韻的意識」といつても、何か特別な「勉強」が必要なわけではありません。昔から子どもたちが大好きなしりとりなどの言葉遊びが、「音韻的意識」を育てる役割をしていると考えられています。

私は、子どもたちの名前や食べ物の名前を使って言葉遊びを始めました。子どもたちの名前を呼ぶ時に、歌うような抑揚を付けながら、

「Sさんの『サ』は『サクランボ』の『サ』」

「H（息子の名前）君の『ハ』は『花火』の『ハ』」

と言ってみたり、

「今日はブ・ブ・ブドウのジュースかな？ リ・

リ・リンゴのジュースかな？」

と語頭の音を繰り返したりしてみせます。一つの音を繰り返すという活動が楽しらしく、娘もキャッキャと笑いながら、

「Sの『サ』は『サクランボ』の『サ』！」

と歌うように繰り返しています。しかし、まだまだ「音韻的意識」は充分ではないようで、脇で聞いていると思わず吹き出してしまおうようなおもしろい間違いをたくさんします。

「今日のジュースは何かな？ ブ・ブ・リンゴ！」

「日君の『ハ』は『サ克蘭ボ』の『ハ』！」

時にはこのような名(迷?)ゼリフも飛び出しますが、そのようなやりとりまで含めて娘と笑い合いながら過ごす時間は、とても楽しいひとときです。

### 歩き始め

乳幼児の育ちはいろいろな面で個人差が非常に大きいと思いますが、移動や歩行も、子どもそれぞれの個性でずいぶん様子が異なるようです。

わが家の娘が一人で歩き始めたのは一歳三か月ごろでした。そして、息子もまた、一歳三か月ごろになって独力で歩けるようになりました。

歩き始めた時期はほぼ同じだったわが家の子どもたちですが、二人が歩き始めるまでの過程はかなり異なりました。娘は、歩き出す前はあまりはいはいをしようとしませんでした。何か欲しい時には「ウ、ウ」と声を出せば、母親の私がやってくれることがわ



かっていたからかもしれません。それでも、どうしても移動しなければならぬ場合には、壁や家具につかまって伝い歩きをしていました。そして、ある日、家具につかまっていた手を離し、数歩、とことこと進むことができるようになる、すぐに家の中を自由に歩き回れるほど、あつという間に歩くのがうまくなりました。そのころ撮影したビデオには、歩けるようになったのがうれしくてたまらないといった様子の娘の映像がたくさん残っています。

一方の息子は、姉の後をついて回りたい気持ちが強かつたらしく、ずいぶん早くからははいはいをするようになりました。最初のうちはおなかを床に付けた「ずりばい」でゆっくり移動していましたが、次第にそのスピードが上がり、最終的にはおしりを上げた「高ばい」の姿勢で、娘が歩くのに追いつけるような速さで移動するようになっていました。しかし、移動したい気持ちが強いかかわらず、息子はなかなか歩き出そうとしませんでした。家具にかまつてつかまり立ちはするのですが、移動しなければならなくなると、おもむろにははいを始めるのです。体の割に少し頭が大きい息子は、立ち上がるとバランスを崩して転んでしまうことも多かったのです。家具にかまつている手を離すのが怖かったのかもしれない。

その息子も、ある日突然、とことこと歩き始めました。そして、いったん歩き始めると、どんなに転

んでも、もう、はいはいに戻ることはありませんでした。転んでしまっても、「よっこらしょー」という感じでもう一度座り直し、短い手足を一生懸命踏ん張って立ち上がり、またとことこと歩きます。

その姿からは、歩き始めたころの娘と同様に、歩くのが楽しくて仕方ないという喜びが伝わってきます。

娘も息子も、歩き始めた時期はどちらかといえばゆっくりでしたが、私は「そのうち歩くだろう」とのんびり考えていました。子どもの育ちは「速く進めばよい」というようなものではなく、一つひとつの時期を充分に楽しんで過ごすことが大切なのだと思います。そうしていれば、やがて機が熟した時に、子ども自らの力で次の段階へと移っていくだろうと思っています。

### 言葉と遊び

二人の子どもは、言葉の発達でもそれぞれ異なる

特徴がありました。

娘の初語は「ワンワン」でした。その後は、「オトータン（父）」などの名詞に混ざって、「ネンネ（寝かしつけ）」「ハイ（モノを渡す）」「ドウゾ（モノを渡す）」「イナイイナイ（いないいないばあ遊び）」といった人と人とのやりとりにかかわる語彙を獲得していきました。

それに対して、息子の初語は「オトータン（父）」「オカータン（母）」でしたが、その次に出た言葉は「オチタ（落ちた）」でした。モノを手当たり次第に投げ落としては、「オチター！」と自分で言うのです。その後も名詞だけでなく、「アッタ」「イタ」「デタ」など動詞の過去形が初期から多かったのが、息子には特徴的でした。モノの名前だけでなくモノの動き方に興味があるようで、語彙の内容もその興味を反映したもののように思えました。

二人の遊び方もかなり異なります。娘が赤ちゃん

だったころから一貫して大好きなのは、人形遊びやままごとです。小さな人形を大切そうにタオルでくるみ、母親の私がやるのと同じように抱っこ帯で自分の体にくくりつけ、小さな声で子守歌を歌いながら、部屋の中をゆっくりゆっくり歩き回ります。そして「やっと、寝た」などと言いながら、そうっと人形を布団の上を下ろし、毛布をかけた人形のおなかを軽く手でとんとんとさすっています。そんな時に私が話しかけようものなら、「大きな声を出さないで！ 赤ちゃんが起きちゃうでしょ！」と私がしかられてしまいます。その様子は、まるで小さなお母さんといったところです。

一方、息子はブロックや車のおもちゃが大好きで、人形にはあまり興味を示しません。ブロックをつなげては分解し、またつなげては分解し、ということを繰り返しては、うれしそうに笑っています。そして、ブロックを放り投げてから、私のほうに向かって

て「オチタッタター! (落ちちゃった)」と言うのです。

私が「そうね、落ちちゃったわね」と相づちを打つと、「ウン」と大まじめな顔でうなずき、またプロックを手に取り、つなげたり離したりを続けます。その姿は実験に熱中する科学者のようです。

中沢は、対人関係<sup>注2</sup>を題材としたごっこ遊びを好む「物語型」の子どもと、積み木を積み上げたり砂団子<sup>注1</sup>を並べたりという遊びを好む「図鑑型」の子どもとがいると指摘しています。わが家の二人の子どもを見てみると、娘が「物語型」、息子が「図鑑型」に対応するように思えます。もちろん、娘もまたモノへの興味を強く示す場面もありますし、息子も母親や姉の心の動きに敏感に反応します。「物語型」「図鑑型」はあくまでも「傾向」としてとらえられるもの<sup>注3</sup>のようです。

わが家の子どもたちを見てみると、同じ親から生まれ、同じように育てられているはずの二人が、こ

んなにも異なる個性をもっているということが改めて不思議に思えます。そういう意味では、第一子の娘だけでなく、第二子の息子との関係もまた、私にとっては初めての体験の連続なのです。そして、二人の個性の違いがはつきりしてくるにつれ、母親として、子どもたちを単純に比較するのではなく、その違いを大切に受け止めていきたいと思うようになりました。

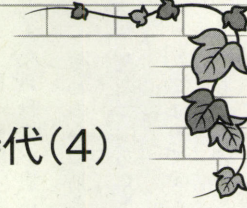

これから二人がどのように成長していくのか、それぞれの育ちを見守りながら過ごしていきたいと思っ  
う毎日です。

(十文字学園女子大学准教授)

#### 参考文献

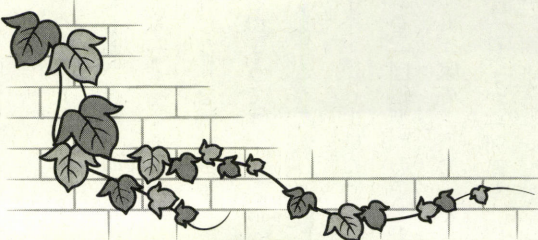
1 天野清著『子どものかな文字の習得過程』秋山書店  
一九八六年

2 中沢和子著『イメージの誕生—〇歳からの行動観察—』  
日本放送出版協会 一九七九年



幼稚園の源流を求める旅  
森有礼の第二次在米時代(4)

## 森有礼の第一次在米時代



国吉 栄

### 森有礼の第一次在米時代

ボストンからニューヨークへは列車で向かった。早めの列車を予約しておいたので、昼過ぎにはニューヨークのペン・ステーションに着いた。車窓に続く美しい海岸線の眺めに目を奪われているうちに、大都会は突然のよう

に現れた。  
森有礼にはわが国初の外交官となる前に米国で暮らした経験があり、ニューヨークにはその時代に関係する資料がある。

森有礼は弘化四(一八四七)年七月十三日、薩摩藩士の五男として鹿児島城下に生まれた。薩英戦争後急速に開国へと方針転換した薩摩藩が、幕府の禁を破って自藩の若者を欧州へ派遣することを決めた時、その一人として選ばれた俊英である。当時数え年十九歳。開設されたばかりの藩の洋学校・開成所の英学専修生であった。

慶応元(一八六五)年、英国に渡った留学生たちは、最年少の少年が長崎商人グラバーの実家に預けられたほ

かは、全員がロンドン大学に入学し、海軍測量術や陸軍機械術などを学んだ。しかし一年後、藩の都合で半数が帰国し、森を含む六人が残った。だが、それからさらに一年後の慶応三年七月、彼らは一斉に学業を放棄して、米国に渡ってしまふ。森はそれからおよそ九か月を米国で過ごした。これが彼の第一次在米時代である。

私のニューヨーク行き目的の一つは、コロンビア大学バトラー図書館であった。ここに、森の生涯に深くかわるHarris-Oliphant Papersと呼ばれる文書がある。

私が森有礼に幼稚園史との関係ばかりでなく一人の間として関心を抱くようになったのは、『東北大学教育学部研究年報』に連続発表された林竹二氏の森有礼研究(1967, 1968)を読んだことがきっかけであった。それまで学問的テーマとしては取り上げられてこなかった森有礼の若き日の経験―それは、英国で勉学中にキリスト教の異端に誘われてアメリカに渡り、閉鎖的な村落の中で牛を飼い、パンを焼き、皿を洗って暮らした、という極めて特殊な経験であったが―を正面から取り上げ、それ

らを詳細に検討することを通して新たな森有礼像を描き出した、斬新で熱情あふれる論文であった。

森有礼研究者でもない私が、幼稚園関係の資料収集だけでなく、森研究の基礎資料を直接確認したいと考えるほど彼に興味を抱いたのは、彼が、幕末・明治初年の禁教下に、キリスト教と先のような特殊なかわりをもっていたからである。林氏の論文には、すでにハリスの信奉者となっていた森が、勧誘のため、幕府の留学生取り締りとしてロンドンに滞在中の中村正直らの宿を訪ねたという資料も紹介されていた。中村は東京女子師範学校に幼稚園が付設されたときの校長である。私は保育史を学び始めたころから、キリスト教課者という特殊な経歴をもつ関信三が日本の幼稚園を解する鍵であると感じていたので、森と中村との間にもキリスト教を仲立ちとしての密かな出会いがあったことに、非常に驚かされたことを覚えてゐる。

幼稚園における関信三の働きを明らかにするためには彼の個人的経験に向き合うことが必要だったように、外

交官としての森の働きを理解するためには、公的活動に入る前の彼の経験に向き合う必要があるのではないか。彼の経験は非常に特異なものであるが、ハリスやコロニーの奇怪さにとらわれて、彼がその生活を受け入れたことの意味を過大に、あるいは過小に評価したり、または評価すること自体をはじめから放棄してしまうのではなく、評価は先送りにして、彼の姿をできるだけ具体的ににとらえる必要があるのではないかと私は考えていた。

### Harris-Oliphant Papers

Harris-Oliphant Papersには、ハリス(Thomas Lake Harris)と、日本人たちをハリスに誘引した元駐日英国公使館書記官で、当時下院議員となっていた英国貴族オリファント(Laurence Oliphant)、及びハリスのコロニー(Brotherhood of the New Life)にかかわる雑多な資料が含まれている。中でも興味深いのはクーパー夫妻宛オリファント書簡であった。夫妻はオリファントの親しい友人貴族で、英国におけるハリスの信奉者である。彼らは一足先に母親

と共にコロニーで暮らしていたオリファントに代わって在欧の日本人たちを接待し、彼らの米国行きを助けた。夫妻への手紙には、日本人たちへの言及のみならず、きわめて閉鎖的で、しかし一面では実社会と強い世俗的なつながりをもつこの奇妙な集団についての、具体的な情報に豊富に含まれている。林氏がかつてこれらのコピーを持ち帰り、研究を深められた。

森研究が未完のまま林氏が亡くなられたため、それらの書簡は、当時刊行中であった『林竹二著作集2 森有礼 悲劇への序章』(1986)の末尾に、I. P. Hall氏の校訂によって収録された。ホール氏は一九七三年に *MORI Arinori* (Harvard Univ. Press) を出された著名な森研究者である。しかし氏は、読者の便宜を図るため、林氏を持ち帰られた書簡(それはコロンビア大学が所蔵するクーパー宛書簡のほぼすべてであったが)のうち、十通を割愛されたのである。私はそのことを大変残念に思っていた。いつかそれらを読んでみたいという思いがあった。バトラー図書館の一階で登録を済ませて、六階の Rare



Book and Manuscript Library) に行った。受付カウンター

の女性に手取り足取り教えていただいて資料の請求表を作成し、ようやくガラス張りの閲覧室のドアを開けた。

細長い閲覧室の正面に座っている司書に請求表を渡し、自分のパソコンをセットする。まもなく横手のドアが開いて男性が箱を三つ運んできた。司書は私に目で合図し、私は箱を取りに行く。一箱終わったら次の箱を渡します、と小声の指示。一箱受け取って自分の席につき、ふたを開け、一ホルダーずつ取り出して文書を確認し、コピーが必要な文書を備え付けの黄色い紙で挟んでいく。私を含め、三人が黙々と文書を読んでいた。

すでに読み慣れた文章も、異国の、この静けさの中で読むと、胸に迫るものがある。

「私はここで世捨て人のように暮らしている。箱で小屋やベッドを作り、食事は籠に入れて運ばれてくる。母とも話すことはできない。だから日本人たちとも話すことはできない。彼らは毎日厳しい労働をし、しかも喜びに輝いている」(一八六七年九月<sup>不明</sup>\*日)

「先週の日曜日、フェイスフル(ハリスのこと)が帰国以来初めて説教をした。四十人ほどが出席した。愛と歓喜が沸き起こり、みな涙を流し抱き合った。日本人たちは特にそうだった」(一八六七年九月二九日)

「日本に関する記事が載っている新聞を送ってくれ。日本人が喜ぶだろう。日本人は私たちの宝だ」(一八六八年四月十二日)

ハリスと日本人学生とは時代が出会わせたとすべきであろう。両者にとって決定的だったのは、学生たちが倒幕によって新たな国造りをめざしていた薩摩藩の留学生だったことであり、ハリスが既存のキリスト教の影響が最小限であった日本こそ、彼の理想を実現するに最も適した国と考えていたことであつた。ハリスが表現していた最大のテーマは再生であつた。彼は産業革命後の英国の悲惨な人民の状況を描き出し、責任を負うべき政治と教会の腐敗を厳しく批判して、信仰によって再生した人間によって新しい世界をつくり出さねばならないと説いていた。ハリスは学生たちに、信仰による日本再生

と、日本を発信地とする世界再生を説いたのである。

アメリカに渡った学生たちは、私心を捨ててどんな仕事でも喜んで取り組むことがハリス入門の初めであると教えられ、農作業に励んだ。彼らは英国においてそうしたように、米国でも密出国の日本人留学生たちに積極的に働きかけ、コロニーへと誘った。「ハリス翁の高説」を求め、入村する日本人は増えていった。

## アミーニアへ

ニューヨークでの調べものを終えた私は、アミーニア(Amenia)に向かった。慶応三年の夏、学生たちが英国から渡ってきた時に、ハリスのコロニーが営まれていた村である。

ニューヨークのグランド・セントラル・ステーションからメトロ・ノースのハーレムラインに乗った。列車は北に向かつてどんどん谷間に入っていく。百四十年前に、将来を囑望されていた待であった彼らは、繁栄の都ロンドンでの学業を捨てて、こんなに深い谷間の奥に

やってきたのだ。列車を乗り継ぎ、二時間と少して終点のWassaticに到着した時には、乗客はほんの数人しか残っていないかった。Wassaticはハリスのコロニーが最初に作られた所で、アミーニアはそこからさらに数マイル奥に入った村である。

そのあたりはオランダ人の入植地で、彼らが運営するバスが村内を走っていると聞いていた。だが、そこは山の中の無人駅で、バスなど走っている気配もなかった。困って、同じ列車で降りてホームのベンチに座っていた女性にアミーニアに行く方法はないかと聞いたところ、「夫が車で迎えに来るから送って行ってあげる。アミーニアのどこに行きたいのか」と言われた。アミーニアに行きたい理由と、そのどこかは私にもわからないのだと話すと、「ではアミーニアの図書館に連れて行ってあげる。そこから始めれば何かわかるかもしれない」と連れて行ってくださった。もう本当に心から感謝し、ご夫妻と図書館の前でお別れした。

村の小さな図書館で、私はまたしても助けられた。古

いものはこのあたりです、と案内された書架の前でただ古だけの本に当惑していると、本を返却に来た女性が気づいて話しかけてくださった。彼女は私の話にとても興味をもち、あちらこちらに電話をして情報を集め、古老の家を訪問し、古い地方紙のコピーをとり、コロニーがあつたであろう場所を探して車を走らせ、村の風景を見せてくださった。ドライブの後、私を美しいご自宅に連れて行き、遠くから来たのだからトイレを使いなさいといったわり、ご主人も一緒に村のレストランで食事までごちそうしてくださった。ワインも注文し、これはこの

村でできたワインだと教えられた。ハリスのコロニーでもワインを作っていた。森有礼もぶどう畑を耕していた。彼らのワインもこのような味だったのだろうか。彼らは



聖なる酒と言っていたが……。

最後に彼女は私を *Massie* の駅まで送り、お礼を言う私に、私にとつても忘れられない一日になりました、ありがとう、とお礼まで言ってくれました。

夢のような一日だった。私一人では到底たどり着けず、帰ってもこれないような所に行くことができ、森有礼がいた場所について立つたのだ、という感激でいっぱいであつた。大勢の方々に助けられて実現できた旅であつたと実感している。

### 分裂と帰国

アミーニアで学生たちが労働に明け暮れていたころ、コロニーの移転計画が進んでいた。ニューヨーク州の西端、エリー湖畔の村ブロクトン (Brocton) に土地を買収したからである。このあたり一帯は米国有数のワインの生産地で、ハリスがここに移転したのも、昼夜の寒暖の差が激しくぶどう作りに適した土地で、大規模なぶどう園を経営し、ワインを作るためであつた。広大な敷地内

に鉄道の駅を作り、ホテルを建て、レストランも経営した。

二〇〇八年の旅で、私は念願のプロクトンを訪れた。

パツファローから車で南に一時間ほどの、ぶどう畑と刑務所が特徴の小さな村である。人目につかないところにあるトンネル状の巨大な石組みのワイン貯蔵庫と、いまは個人宅となっているVine Cliffと呼ばれる家と、大きな納屋が往時をしのばせる。木立の陰から、ふいに野良着姿の日本人が現れてきそうな、不思議な気がした。

移転は徐々に始まった。十二月下旬、総勢十三人の日本人がプロクトンにそろった日、ハリスは日本人たちのために茶会を開いた。それからまもなく將軍慶喜の大政奉還の報が届くと、コロニーは喜びに沸いた。日本人たちはもちろん、ハリスも涙を流して喜んだ。しかし、エリー湖も凍る厳しい冬を越え、村中が美しい緑におおわれるころ、学生たちは分裂した。

学生の一人畠山義成は、何につけ神命と称して命じるハリスに対して生じた疑念と、彼がそこを去るに至った顛末とを記している。ハリスは自分の著書を日本語に訳

せと命じた。それが神命であるなら、何よりその仕事を優先すべきではないか。自分たちもそうしたい。それなのに早朝から夜遅くまで農作業を命じられ、疲れきって翻訳する時間などないではないか。本当にハリスの命は神命であるのか、と。

分裂の直接の契機は、日米の間でもし戦いが起きたらどうすべきか、という学生間に起きた議論であった。祖国のために戦うべきか、中立を守るべきか。議論は沸騰して決着がつかず、ハリスに問うたところ、「我々は国籍によるのではなく神の義のために戦うべきである」、との答えであった。これを受けて、自分は祖国のために戦うという畠山が出て行った。畠山を追うように学生たちは去り、残ったのは森と鮫島尚信、ほか二人であった。落胆したハリスは、森と鮫島に、帰国して混乱の中にある日本の再生のために力を尽すよう勧めた。

帰国を決めた二人は米国に残る仲間の手紙を書いた。「いま自分たちが帰国するのに特別な目的があるわけではない。ただ祖国への責任を果たすためである。自分た

ちが無知であることも無力であることも、何ほどのこともできないこともよくわかつている。しかし我々は動乱と暗黒の中に身を投じることに決めた。そうすべきと感じたからである。自分たちが王国を回復するための最も小さな犠牲になるなら、それ以上の喜びはなく、本望である」と。二人はまだ元号が明治に変わる前の、動乱のただ中に帰国した。

死をも覚悟して帰国した彼ら waited いたのは、新政府による重用であった。三年にわたる英米での体験は新政府にとって得がたいものだったからである。

二人は外国官権判事という要職を与えられたのを皮切りに、次々に責任ある職務を兼務した。森は議事体裁取調、学校取調、軍務官判事、議事取調……。青年たちに課せられた職務の範囲の広さと重さに驚嘆させられる。

二人は連名で、「多くの人々が戊辰戦争の苦しみの中にあるいま、不肖の我らが重責を汚し過当な給与を得ていることは実に不安の至りであり、給与だけでも下げていただきたい。自分たちは三十円あれば十分である」と、

給与下げ願いを提出した。

翌明治二（一八六八）年三月に公儀所が開設されると、森は議長心得を命じられた。彼は次々に議案を提出するが、傲岸（ごうがん）とも見える姿勢は強い反感を招いた。加えて二人には制禁のキリスト教に通じているという疑念があった。そこへ森がいわゆる廃刀案を提出。議案は完璧に否決され、森は辞表を提出して故郷鹿兒島に帰った。

彼は廃仏毀釈で荒れ果てた寺の一角に英学塾を開いて若者たちを教えていたが、翌年の秋、突然の出府命令を受ける。米欧に初めて駐在外交官を置くことになり、森と鮫島に白羽の矢が立ったのである。森は駐米小弁務使、鮫島は駐英独仏兼任小弁務使に任命された（ただし英国は若造という理由で彼を認証せず、独仏二か国の兼任となる）。上京した森は鮫島と同居し、国家の根本にかかわる命題を見据えて、共に渡航の準備をした。

鮫島の渡欧に続いて、森も米国に向けて出発した。弱冠二十四歳の若き外交官の旅立ちであった。

（彰栄保育福祉専門学校・白百合女子大学非常勤講師）

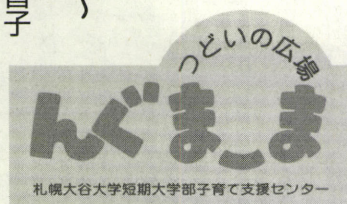
保育の現場から

「友だちをみつけよう」

「みんなで大きくならろう」

「つどいの広場「んぐまーま」の取り組みから」

山田智子



「んぐまーま」ロゴ

(デザイン：同学保育科准教授  
清水郁太郎氏)

「んぐまーま」とは

札幌大谷大学短期大学部は、開かれた大学として地域の声を教育や研究に生かしたいと願い、二〇〇五年九月に大学の一教室を利用して子育て支援センターを開設し、センター事業の一環としてつどいの広場「んぐまーま」を毎週一回十時から十五時まで開催しています。

NPO法人子育て応援かざぐるま（以下「かざぐるま」）は、代表を含むスタッフの約三分の一が同学の

卒業生ということもあってつどいの広場の運営を受託し、専任スタッフ二名を配置しています。

開設の十か月前から保育科の先生方と「かざぐるま」で準備会（開設後は運営会議）を立ち上げ、ひろばの名称、目的、理念、活動内容、学生の授業との関連や受け入れ体制、環境設定、広報活動など、一つひとつをていねいに協議して進め五年の月日が流れました。

以下、保育科の先生方と「かざぐるま」が協力して創り上げてきた「んぐまーま」について紹介させていただきます。

## 「んぐまーま」のしくみ

「んぐまーま」のころは、友だちをみつければ、みんなで大きくなる。子どもは共に育ち合う友だちを、親は地域と一緒に子育てする仲間をみつめる場となつていきます。

「んぐまーま」で大きくなるのは子どもだけではありません。同学の保育科学生もひろば実習（二年「家族援助論」）や研究、ボランティアの場として、学生が「家庭における日常生活としての子育て」に触れながら、現代の子育て事情、子育て支援の趣旨、広場の理念、親子へのかかわり方を具体的に学ぶ場となつていきます。学生が「んぐまーま」に入ること、親も自分の子育てや子どもを通して未来の保育者や子育て支援者の養成にとっても協力的ですし、親子が定期的に大学に訪れることで、大学全体で子育てを応援しよう、という校風も育まれています。「んぐまーま」では、子どもの豊かな育ちを軸として、親も、学生も、スタッ

フも、教職員も、大学も、そして地域も共に育ち合うことを大切にしています。

### お互いに気持ちよく過ごすために

「んぐまーま」ではあえて約束事を作らず、利用者へのメッセージも、みんなが気持ちよく過ごせるようにお互いに配慮しましょう、というひと言に留めていきます。多胎児を抱えた親子も、障がいがある親子も、外国籍の親子も、産後間もない親子も、日常のさまざまな悩みを抱えた親子も、それぞれの親子が「んぐまーま」で安心してありのままに過ごせるように願っています。

「いままで視覚障がい者の人と接したことがなく、どのような気遣いをしていいのかわからないので、どうしたらいいのか聞いてみたい」「自分の障がいについて周りの子どもたちにどんなふうの説明したらいいのでしょうか？」「何か力になりたいので、大変な時はいつでも知らせてね」などと、利用者同士がお互いに理

解し合おうとする様子が自然に見られ、大人が助け合  
い、支え合う姿にふれながら子どもが育っていきます。

## ノンプログラム・スポットタイム

「んぐまーま」は基本的にノンプログラムで、大人も  
子どもも一人ひとりが主体的に過ごすことを大切にし  
ています。来場するなり興味をもったおもちゃに一目  
散に向かう子どももいれば、お母さんのひざの上でし  
ばらく周りの様子を見てから、おもむろに動き出す子  
どももいて、子どもは何かしら自分の意思やイメージ  
をもって行動していきます。大人も、ほかの利用者や  
スタッフとのおしゃべりを楽しみに来る人もいれば、  
子どもを遊ばせつつのんびりしたいと思う人もいて、  
それぞれが希望する過ごし方が尊重されています。

ただし、お昼前の十一時三十分と、終了前の十四時  
五十分にはスポットタイムとして遠野のわらべうたと  
絵本の読み聞かせを行っています。まだ遊びを続けた  
い子どもはそのまま遊んでいてよく、あくまで自由参



▲「んぐまーま」の親子の様子



加としています。

乳幼児期は離乳食や昼寝の時間など生活リズムに個人差があるので、昼食は十一時三十分のスポットタイムの後、室内の座卓テーブル四台でおなががすいた親子から随時とるようにしています。一つのテーブルに三家族くらいが座り、談笑しながら食事をしていきます。親たちはさまざまな話題でおしゃべりを楽しみ、子どもたちはほかの子どもが食べる姿に刺激を受けるのか、家庭での食事よりも落ち着いてよく食べるそうです。大勢で食卓を囲む機会が少なくなっている今日、「んぐまーま」での食事風景はいつまでも大切にしていきたいです。

### 子どもの育ちをみんなで見守る

「んぐまーま」に集まる子どもたちは〇〇三才が中心です。おもちゃの取り合いなど日常的な子ども同士トラブルについては、周りの大人は事前に回避しようと先回りしてかかわるのではなく、安全に配慮しつつ

も子ども同士でどう決着をつけるのかを傍らで見守っています。子どもたちは周りの大人の見守りの中で、安心して自己主張をし合います。大人はその結果を受け止め、「使えなくて残念だったね。〇ちゃんもほしかったんだよね」とそれぞれの気持ちに寄り添うようにしています。

最近では公園などで子ども同士のトラブルが発生した時に、親が相手の親の顔色をうかがいつつ、まずは自分の子どもに我慢をさせる場合が多いと聞きますが、「んぐまーま」では「〇ちゃんの、ほしい」という気持ちも大事にしたいんじゃないかな。もう少し子どもたちに任せて様子を見ましようよ」とスタッフが親たちに声をかけています。親たちは最初はドキドキしながらも、おもちゃの取り合いを子どもたちの育ちの機会ととらえて、子どもを信じておおらかに見守ろうという雰囲気徐徐に浸透していきます。周りの大人が子どもの理解を深めることは、子どもが育ちやすい環境づくりへとつながり、それは子育てのしやすさに

もつながらることでしよう。

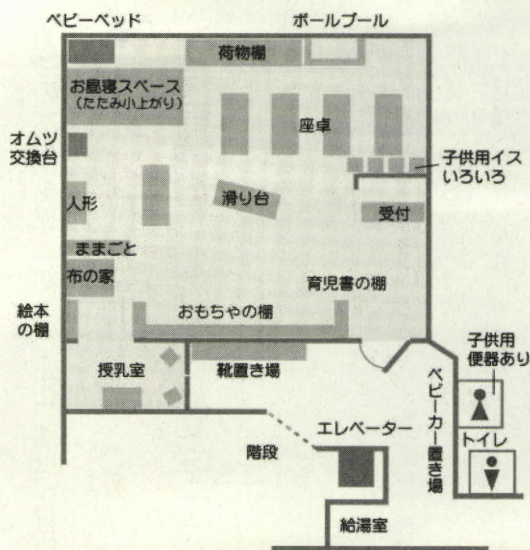
また、実習に入った学生がよく話すことですが、誰が誰の親で誰が誰の子どものものか、一見してわからないくらいに入り混じって過ごしています。子どもたちも安心して自分の親以外の大人にかかわり、優しく抱っこしてくれる人、絵本を持っていくと気軽に読んでくれる人、折ってほしい折り紙をていねいに折ってくれる人、積み木遊びなどにじっくり付き合ってくれる人など、子どもの方がわかまえていて自分から近寄っては遊んでもらっています。「んぐまーま」での日常の小さなエピソードを通して、「いままでは二十四時間、自分一人で子どもを見なければならぬ」と思っていたけど、ここではみんなの子どもをみんなで見守っているのですね」というあるお母さんの言葉のとおり、子育ての大変さも楽しさも仲間と分かち合いながら、親も子どもと一緒に一歩ずつ親として育っていけばいいんだ」と気づき、自分らしく自然体で前向きに子育てするようになっていきます。

## スタッフの役割

スタッフは誰でも気軽に参加できるように温かく親しみやすい雰囲気づくりを心がけ、特に新規の利用者に対してはていねいに対応するようにしています。大人も子どもも一人ひとりの人として大切にし、その人自身が本来もっている力を信じて肯定的な見方をするようにしています。子どもを媒介として親同士がつながる場面が増えるように心がけ、親子と学生、親子と情報、親子と地域、親子と社会など、さまざまなつながりも行っています。

子どもの気持ちを尊重して子どもの行動を温かく見守ったり、子どもが発する言葉や合図にていねいに受け答えしたり、子どもとのかかわり方や子育ての楽しさとやりがいを伝えるモデルという役割もあります。

親子により適切な支援を行うために、スタッフはひるばの目的や理念を常に心に留めながら自己研鑽していくことが必要です。毎回の終了後には一日の振り返



▲「んぐまーま」室内図

りをていねいに行い、個々の親子への対応だけでなく、場をどう読みどう受け止めていくのか、各場面でのスタッフの役割分担などについて整理し共有するようになっています。

保育科の先生方との年数回の運営会議では、年度方針、利用状況、周年行事、学生がかかわる夏祭りと冬

祭り、親子との情報交換会、学生の受け入れ体制、環境設定などについて細やかに協議し、常に情報を共有しながら進めています。

これからも「んぐまーま」を通して、利用者一人ひとりが地域の中で仲間をみつけ、自分のもっている力を発揮しながら、子育ても楽しめるような支援のあり方を発信しつつ、地域の子育て支援の質の向上や地域のネットワークづくりに貢献すると共に、誰もが安心して子育て・子育てできる環境づくりにつなげていきたいです。

(NPO法人子育て応援かざぐるま代表理事・

札幌大谷大学短期大学部保育科非常勤講師)

参考

\*札幌大谷大学短期大学部子育て支援センターつどいの広場

「んぐまーま」

<http://ngma-na.boou.jp/>

\*NPO法人子育て応援かざぐるま

<http://kazaguruma-i-cis.com/>

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(42)〉

## 学内シンポジウム

### 「保育現場と協働して学生を育てる」を振り返って(2)

佐治由美子

五月号掲載の学内シンポジウム第一報では、保育者養成のイメージを大学と現場とで共有することに向けられた現場の方々の提言内容の前半部分、そしてそれへの応答としての参加者の感想を、併わせて紹介しました。

今回の第二報は、本シンポジウムの後半部分の主な発言をお伝えし、最後に昨年五月と九月の二回にわたるシンポジウム開催から、私どもが学び得たことを振り返ってみたいと思います。

#### シンポジウムの実際

シンポジウム後半の発言者の所属は、次のとおりです。

- ・板野昌儀「愛育養護学校」
- ・私市和子「お茶の水女子大学（以下、お茶大）  
附属いずみナーサリー」
- ・高橋陽子「お茶大附属幼稚園」
- ・佐藤キミ男「障児放課後クラブはすねっこ」
- ・浜口順子「お茶大幼保プロジェクト」

板野 「総合的保育者」という言葉がありましたね。

どういう名目であれ学生さんが現場に来て、人とのかわりを体験して帰っていく。受け入れたい子どもの行為を目の前にながらもそこにつき合い続ける、ということもある。実習したことが、学生さんにとって、いままでにない自分に出会う、そんな入り口に立つような体験になっていってくれば、と願っています。

自分自身もいつもそうありたいと思っています。子どもたち一人ひとりと向き合うたびに、一から出会うことになる。一つのことと同じようには通用しない。

この子の幸せとあの子の幸せは全然違う。そのように一人ひとり違う子どもたちが、遊びの中で分かち合えたと感じてくれるような体験ができると、そこでの関係は生きてくるのだと思います。その実感というのを、学生さんにも感じてもらいたいです。

佐藤 いま日々考えているのは、受けとることと応え

ること。観察という入り方でも現場に身を置くということとは視覚だけではすまないことがあるとしたら、どんな覚悟をもつてそこに入るかということが、自身自身に問われてくることになる。そこにその人がいかに真摯に向き合えるか、ということになっていくと思う。

実習の中で子どもと関係がつかれなくて、離れて見ているという学生さんの姿もあります。そこでどんなふうに過ごしているのか、何を感じているのか（そこでの自分をどのように受けとるか）、そのことを考えていけば実習の仕方そのものも変わってくるのかもしれない。

一回きりであっても、その出会いの中で子どもと学生さんがお互いに何を残し合っていくのか、ということが実習の大事なポイントになっていく場合もあると思います。そのあたりをできるだけ大切にしていきたい、と思っています。

私市 私には思いついたら始めてしまうところ

があるので、おもしろいことや楽しいことを子どもと一緒に見つけてみようという気持ちで保育を続けてきました。

お茶大の学生さんは、観察が上手で子ども理解もよくできていると思います。ただ、実際の保育に入る時になると、子どもとの距離をどのくらいとつたらいのか考えてしまうところがあるようです。子どもをよく見ているから、慎重になって引いてしまうのかもありません。やはり、その見極めが大事かなと思います。見守るだけでなく、自分でも遊んでみるということが必要かもしれません。子どものほうから何かに気づいて、そこで関係ができていくこともあるでしょう。一緒に遊ぶことで、学生さんにとっても共感できるチャンスが生まれるのではないかと思います。

**高橋** 子どもと一緒に楽しんじゃうという話に私も通じるところがあつて、自然の変化とか子どもが目を向けているところに気づける自分でもいたいなと

思っています。保育者になるからとか、母親になるからとか、何かのためにということではなく、自分自身を感じたことを一緒に感じている人がいるということを実感として感じられる、そんな気持ちをもつてほしいなと思います。

一緒に保育をしても保育者間で子どものとらえ方が違うことに気づくことはあるし、保育に正解というものもないと思います。同じ場面にいってもいろんな感じ方があるということ、知ることができるのが貴重だと思っています。

学生さんが実習の授業で振り返りをする時などに、いろいろな感じ方をする一人ひとりであつていいのだらうと思うし、それぞれ違う感じ方をしていても、同じ空間にいるということを感じる人であつてほしい、そんなふうに思います。

**浜口** 四年間幼保プロジェクトを行う中で、初めて附属の現場との関係がつくれたと思います。これを出発

点に保育者養成を考えようとしてきましたが、ここに来て学部的一年生が実習体験を経て大きな変化を遂げていることに私たちは気づきました。そこで、養成イメージを現場の方々と共有してみたいと思うようになります、このようなシンポジウムを企画しました。

皆さんのお話をうかがって感じたことをまとめてみたいと思います。

(1) お茶大には、子どもとかかわる体験自体が少なく人間関係が苦手という学生がかなりいます。そういう学生の気持ちを実習でほぐすという意味もあります。子どもに出会ってまず驚く体験をしてほしいという思いがあります。いい経験になればいいのですが、傷つく学生も出てくる。そこをどうフォローしたらいいか、というのも大事な課題で、やっぱり、やってよかったという学生の思いでつなげていくことを心がけねばならないと思います。

(2) 現場の方々のお話をうかがって、保育者自身が、

子どものことをすっかりわかった者として指導するのではなく、わからないままに手探りしながら出会っていく、というところに共通点があったように思います。子どものことをいつかはわかることができるように、というあきらめないあり方が提示されたようにも思います。保育者養成は、人を育てるのか専門性を育てるのか、この二つが調和しうるのか、この点はこれから考えていかなければならない、と思っています。

(3) 学生が、自分のつたない感想をすっかり受けとめてくれる大人に出会うことにも大きな意味があると思います。この厳しい社会の中で子どもを守る立場で社会人として生きている大人がいる、ということを知る大事な機会になるでしょう。学生自らが疑問をもち考えていく中で社会的視野を広げていくということも、保育者養成に盛り込んでいきたいです。その一歩として、子どもだけでなく大人と出会うということを大切にしていきたいところです。

## 二つのシンポジウムを経て<sup>注</sup>

少子化の流れの中で育ってきたいまの大学生が、保育を専門に学ぼうとする者であっても、子どもに触れる体験を豊富にはもち得ていないという傾向は、お茶大に限らず広く認められるところでしょう。

しかし、このような社会現象があつてなお、保育を学ぼう、保育を目指そう、と自らの目標を掲げる若者たちが少なからずいるということに、保育者養成に取り組む私たちは、希望をつないでいきたいと思ひます。

幼保プロジェクト・リーダーの浜口によるまとめの中に、「そういう（子どもとかわかる体験自体が少なく人間関係が苦手という）学生の気持ちを実習でほぐすという意味もありますが、子どもに出会つてまず驚く体験をしてほしいという思いがあります」という発言があります。

学生たちの気持ち、養成側の教育的配慮として

「ほぐす」こと以上に、学生たち自らが「驚く」体験をするような学習環境を用意するところ、職業的保育者養成に特化しない総合的保育者養成の特色があるといえるでしょう。

学生たちが資格取得のためだけの実習体験を積むのではなく、実習を通して、子どもとは何か、大人とは何か、私とは何か、保育とは何か、など……：学生自身の課題を投射せずにはいられないような人との出会いを体験していくこと、そこに子どもにかかわつていく人材の養成としての総合的保育者養成の意義があるように思ひます。

しかし、浜口の発言にもあるように、子どもに触れる体験がそれまでに少なかった学生は、子どもに「驚く」以前に子どもに「傷つく」場合も少なくありません。子どもに対して抱いていたイメージと実際の子どもの間にズレが生じてしまう場合があるからです。

このような困難に寄り添いつつ学生を育てていくた



めに、学生が子どもへの関心を手放してしまわないよう支える働きが、養成の側に必要とされることとなります。この意味において、総合的保育者養成には学生への臨床的なかかわりが求められるように思います。

ここでいう臨床的かかわりには、学生一人ひとりを一人の教員が支えるという形だけでなく、複数の学生が複数の教員と向き合ったり、学生同士が教員を媒介に支え合ったり、さまざまな形態が模索される可能性があるのでしよう。保育における臨床的かかわりについては、幼稚園や保育所で先生あるいは保育士と子どもたちが支え合う形が多様に展開するその事実から、私たちは多くを学ぶことができると考えます。

最後に、「保育者養成は、人を育てるのか専門性を育てるのか、この二つが調和しうるのか」という課題が残されていることを、確認しておきたいと思えます。

保育者を「育てる」のが保育者養成であることは自明である中で、学生が自ら育とうとしている主体であ

ることは、専門性について議論する際にも忘れずにいたいと思えます。

倉橋惣三は、『育ての心』<sup>注2</sup>の序文の冒頭で「自ら育てるのを育てせよとする心、それが育ての心である」と述べました。この「育ての心」は幼い人たちが育てる心にとどまらず、育ちゆくすべての人たちを広くおおう保育の心を示していると思えます。保育者養成に取り組む私たちも、「育ての心」を養成の心とし、この厳しい社会にあつてなお、自ら育とうとする学生の歩みを、ゆるぎなく支えていくものでありたいと思えます。（お茶の水女子大学幼保プロジェクト）

注

1 二つのシンポジウムとは、保育学会自主シンポジウム「女子大における総合的保育者養成の試み」と学内シンポジウム「保育現場と協働して学生を育てる」を指している。前者については、『幼児の教育』第一〇九巻第二号および第三号を、併わせて参照されたい。

2 倉橋惣三文庫3『育ての心（上）』フレーベル館 二〇〇八年

## 編集後記

雨の季節です。一昨年ドイツ・ミュンヘンの乳幼児保育教育施設を見学しました。朝からかなり激しい雨だったので、室内のにぎやかな様子を予想して出かけました。でも0～6歳の縦割りグループ(20数名)が4つあるその園は、各グループに保育室が2つ、午睡のできる部屋、工作室と小さい隠れ家的部屋まであって、子どもたちがゆったりと遊んでいます。私は外で雨が降っていることも忘れていました。

朝のリングだけの軽食後「外で遊んでいる？」と先生に聞いてから、フード付きレインコートと長靴を身に着けて園庭に出ていく子どもがいました。すでに数人の子が先に出て遊んでいます。そういえば雨の日も外で遊ぶと楽しんだっけ、と懐かしい思いがしました。(H)

## 幼児の教育 第109巻 第6号

平成22年6月1日発行  
編集兼発行人 浜口順子  
編集担当 金子めぐみ・田中恭子  
発行所 日本幼稚園協会  
〒112-8610  
東京都文京区大塚2-1-1  
お茶の水女子大学附属幼稚園内  
発売所 株式会社フレーベル館  
☎03-5395-6604 (編集)  
振替 00190-2-19640  
印刷所 図書印刷株式会社  
定価 550円(本体524円)  
©日本幼稚園協会 2010 Printed in Japan

編集協力 フレーベル館  
表紙絵 後宮ひろみ  
扉題字 津守 眞  
本文カット 田崎トシ子  
編集スタッフ 高橋陽子  
佐藤寛子

ご購入のお問い合わせは、  
フレーベル館までお願いします。  
☎03-5395-6613 (営業)

## 次号予告

〈特集〉いま、倉橋と出会う 7

「うっかりしている時」

榎田正子・杉原 徹・石塚美穂子

・絵本で子離れ(2) 松井るり子

☆次号の内容は都合により変更される場合があります。

## ご意見・ご感想大募集

『幼児の教育』バックナンバーのネット公開開始まりました!

お茶の水女子大学附属図書館のHP上、教育・研究成果コレクション"TeaPot"  
<http://teapot.lib.ocha.ac.jp/ocha/>へアクセスしてご覧下さい。

明治34年発行の創刊号から発行後2年以上たったものまで、順次公開していく予定です。ご意見ご感想などは、[youjimap@yahoocoo.jp](mailto:youjimap@yahoocoo.jp)までお寄せ下さい。

# 毎日の保育をより楽しく演出!

## 楽しく保育室を飾るために

春夏秋冬、季節ごと、年間を通して  
使えるアイデア満載

### 誕生表&壁面アイデア

あかま あきこ、いしかわまりこ、いわいごこ まゆ、  
大橋文男、尾田芳子、小沼かおる、島田明美/著

バリエーション豊かな誕生表と、季節の行事に応じた壁面を紹介。かんたん型紙と工作テクニック集で、製作もラクラク。

26×21cm 96ページ 定価 1,890円 (税込)



10915



### 0・1・2歳のあそびと環境



10916

### 五感を育てる環境作りに

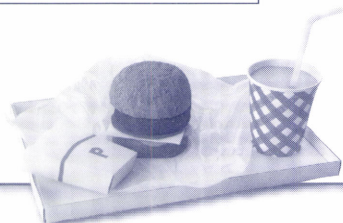
身近にある素材を利用して手作りする、あたたかな環境

### 0・1・2歳のあそびと環境

寺西恵里子/デザイン

乳児の環境に必要なあたたかい雰囲気作りを応援! 簡単にできる手作りおもちゃや室内装飾を紹介。

26×21cm 96ページ 定価 1,890円 (税込)



# 10年後も「選ばれる園」であるために

少子化時代の  
保育をリードする  
視点が満載!

## 次世代の保育のかたち

—幼稚園・保育所の可能性と限界—

吉田正幸／編著

### 認定こども園のチャレンジから 保育の未来を探る!

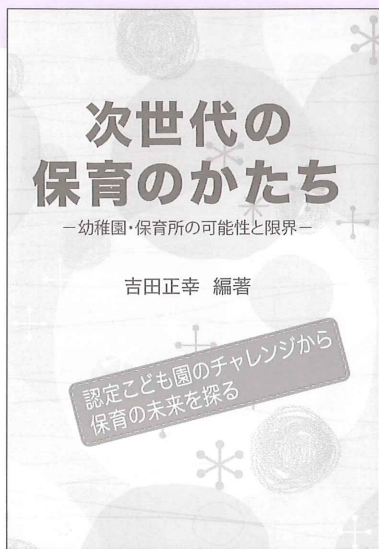
子ども環境が大きく変貌する現代において  
幼稚園・保育所に求められる機能が  
変わりつつあります。

10年後にも選ばれる園で  
あり続けるために  
今、すべきことは何でしょうか?

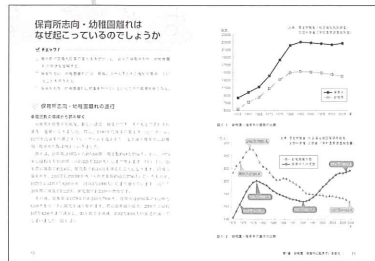
認定こども園の5つのケーススタディと  
イギリスやドイツなど

海外の先進的な事例より、  
近未来の保育のかたちを浮き彫りにします!

21×15cm 264ページ 定価 1,890円(税込)



10746



▲現代の保育事情、幼保の現状と課題を細やかに解説!

### Contents

- はじめに
- 第1章 幼稚園・保育所に起きている変化
- 第2章 認定こども園の誕生
- 第3章 ケーススタディから探る保育のかたち
- 第4章 ヨーロッパの保育事情に学ぶ
- 第5章 幼稚園・保育所の未来の可能性
- おわりに
- 参考文献

定価 五五〇円(本体五二四円)☆

キンダーブックの  
**フレーベル館**